



3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4



古今妖魅考二史卷

島田
藏書

平篤胤輯考

薩摩國 木村鈴滿
武藏國 古橋宗弘

門 同
人 丹波國 池畠厚牧

校

豊貴堂藏書

釋仁海も僧正もて或女房小密通して成尊僧都と云ふ眞弟子成生し矣

古事談よ成尊僧都は仁海僧正の眞弟子なり仁海或女房小密通して男子成生しむ。母堂云く此兒成長せば此事れどもうち披露に處して水銀を嬰兒小服せしむ。水銀を服せる人もし存命されば其陰全うらぎといふ。件此僧都

は男女より於て。一生不犯の人也。仁海僧正も。
鳥を食ふ人れど。房より有りる僧也。雀をえも云ち、取りる
故。ハウくと炒めて粥漬けにせ不用。けるれど。然れど
も有驗の人ふて坐けり。大師の御影小違タガと云、りとも
有ア。空海比再生あひし小や。は十訓抄カニ。仁海僧正は。
小鳥を食ひカギ。院とぞ。はきばとて尋常の僧ヨノツキ。眞似タメ。寺
傍カモらばとあり。雲景ヒカルが未來記アシタノメモリ。愛宕山アハタケを集アツメひて。世を乱
さむと計カウ。天狗の中小。此仁海も有り。アモ。古事談コトハシ。
成典僧正法服を著て。仁海の許へねをし。あけ生は。房人
古カモら不思懸事ヒカル也。と驚ハラきて。仁海小告申ツダ。是ば此僧正を夢見

てけどとて。又法服を著て出遇イデヒ。とりれど。成典地カリ下アリて
禮拜して。座シ昇ボ申スルて云く。大師の尊顔を禮スル奉ムむと
欲ホリする志多年シテ及ムぶ。而シカる小去シカ夜シカ夢ムア。大師を禮奉ムら
むを欲せム。仁海を見ムべきよし。其告シふるふ依シて。參入スル寺
所也と云へ。正れを此事元亨アヘン釈書スル。も見えム。而シカく。首スルは
清水寺スル老別當タチ。進命婦スル。若かアリる時。常アリ。清
宇治拾遺物語。古事談スル。進命婦若かアリる時。常アリ。清
水寺スル參詣スル。小師の僧を淨行八旬ハシナ者アリ。法花
經八万四千餘部讀スル。者アリ。此女房を見て欲心を發スル。
忽タチ小病アリ。既シ死ム。弟子スルども奇アリ。感スル。して問スル。

りらく。此病の有らま。普通の事小非也。思食に事はる。被仰オフセラレちは由ヨシふ凡事れりと云ふ。此時語カタ正ム云く。實小は京
より御堂ヒラ小參ヒラらしく女房ヨウよ近く馴ツナれて物を申さむやと思
ひしよ。此三個年不食スルけ病クモリ小成て。今は己ヌテ小蛇道カミナリよ落
入イハむと。心う凡事れど云ふ。爰ココ子弟子一人進命婦カミナリの許
牙行イハまで。此事をいふ時ハ女房布ヨウボウど歎カクく來れど。病者頭カミナリを
そらで年月送オク送アシる間カニヒゲ毬髮ヨウボウは銀針シルバを立タマる様カニふて鬼
比カク如シ。されど此女恐カワ怖カワ氣色カニヒゲれくちて云ハシマう。年タミごろ憑タミ
奉タマれる志淺リヤウうらカニ。何事カニ小候カニふとも。爭イカナう仰ウムせを背ツムに奉タマら
む。御身カミナリく於カニをきゆせ給タマはざカニ前カニ小。あどう被タマ仰タマざカニし

と云ふ時ハ病僧ヨウソウかき起タマされて念珠カニをとタマ押揉タマて云ハシマう。
嬉ウレシくも來カニらせ給タマしりハ万餘部ヨシ讀タマる法華經カニの最第一比
文カニをば御前カニ奉タマる俗カニ生タマせ給タマはゞ閑白攝政カニ生タマせ給タマへ
女子生タマせ給タマはゞ女御后カニ生タマせ給タマす僧カニを生タマせ給タマはゞ法務
の大僧正カニを生タマせ給タマべしと祈カニ衛カニ畢カニりて卽命終カニりき其後
此女房果ハタして宇治殿カニ思タマを參タマらせて。京極太殿四條宮
三井寺カニ覺圓座主カニを生タマ奉タマれどぞカニ有タマ此カニもかれ不淨
觀カニ成タマせる小や。但カニし加タマく止事カニあき人カニを生タマ奉タマれるを偶然
此事カニが眞カニ其驗カニの如シ。後カニ附會カニしゐる説カニあり法華經カニ
うで然カニるを協カニし有タマむや。

延喜ハあら比處ハ山の増基法師ハ俊子コトハといふ女ヲ契キ成ス。

大和物語ハ俊子ハ志賀ハ詣アリありハ院ヲ増基君ハ云フ法師ハ有リ是ハ比枝ハ小住ム院の殿上モはる法師ハれむ有リ故シ此俊子ハ詣アリある日志賀ハ詣合ハりゆばし殿小局ヲあいて万の事ハ云カはしけレ今ハ俊子ハ帰カるムを爲ル其ハ小増基ハ許ヨ相見テ別ハ事ハ無リせば且物ハ思ハざラぬシ返シひうあれム且ク物ハ思フきムあごとも無クぞ我ハ悲カ志タとレむ有リ言葉ハもいと多くレむアりム同ジ増基君ハやシ旅人ハの許ハ知ラズ草ハ葉ハかレ露ハ身ハあれルやシ心ハ動カく小ハ涙落ムむト

詠ハりり正ハと有リ俊子ハ千兼ハと云フ人の娘ハ小て名高キ歌作コニの姪女ハるム大和物語ハ數條ハ出トり後撰集ハ作者ハも入ア。釋ハ親鸞ハ觀世音ハ夢想ハ妄語ハして肉食妻帶ハ宗ハ始ハ。釋ハ日蓮ハ貢高邪慢ハ惡言ハ放ハるム魔事ハ更ハ少メ言ハ密ヒシカ小日藏ハ眞弟子ハ生ケ。此二人ハ事を數多ハ書ハ小見エあるム此を別ハ委ケ。出定笑語ハ附錄ハ云レれバ此ハ記マ。但シ不姪妄語ハ破戒ハ據リて魔道ハ墮シ事ハ云フ更ハ少メ。儲ハ寶物ハ集ム不姪ト女ハ方ハ目ハ小見エ遣ハらム

と。數多は經中小戒也。女人は煩惱の源也。一度も犯せむ。五百世の間。彼ノ隨ひて六趣小輪廻也。毒蛇を見。とも。女人をは見。辱。恥とも。一見於女人。不離三惡道。永結三途業。何況於一犯。定墮無間獄。あど侍れぞ。見。うち。三途の業を結ぶ。定子。皇后宮は。尼。小ありて後小子を生給へり。増て女は心憂きて。丸物小て。華嚴經。所有三千世界。男子。諸煩惱合集。爲。一人。女人之業障。女人。地獄。使能断佛種子。外面似菩薩。内心如夜叉。とも。説。明達律師。母を犯し。順源法師を知。あがら娘を嫁ぐ。此道小於ては。忍。此事と見ゆ。と有也。

其も同書。和泉僧正は。行業貴^{タト}くて。高位^{タト}を登^{アシ}程^{アリ}。関白兼良公。女。東三條。女院^{ナミ}を立^{マサニ}。明達律師を。下野國の人。幼少^{アキ}して天台山^{アリ}。漸く學文して人とな^ル。成り^ル。天台山^{アリ}。母^{アリ}。見^ムと思^ヒて下^ル程^{アリ}。母^{アリ}。天台山^{アリ}。子^{アリ}。戀^{シカ}。而^ハれぞ。見^ムと思^ヒて登^ル程^{アリ}。旅宿^{アリ}。行^{アリ}。逢^テ。母^{アリ}。知^ラ。而^ハれぞ。見^ムと思^ヒて。順源法師を。流轉生死。往因を觀^ジて。孰^レビト。我^ガ父子^{アリ}。らぬや。は有^ルとて。娘を妻^シ。遂^シ。小往生の素懷^{アリ}。人あり。○篤胤云。明達順源等^ハかざは。我^ガ皇神^{スメガミ}。道^{アリ}。では。豫母都國^{ヨモツクニ}へ逐^{ハシ}る。重罪の極^{キハシ}。流轉生死の

往因を觀じある力ふよどて。極樂往生の素懐を遂^トアドと示せ^ムる。釋魔の態こそ。いとも邪ありけり。然れど往生しめでと示せ^ムる。魔を。釋魔が世を惑は^シ。暫^ハしに幻術小こそ有れ。實^{コト}ふは皇神^{カミ}の道を破^ルれる罪人^ヲ。豫美都國^{ヤマツクニ}へ逐は^シむ事^ヲ。言^ハくも更^ア正。

此を實^ム然^サる言^ハて。右乃倫^{ノリタケ}も。ちほて魔道を免^スざる徒^ト也。遍正僧正の俗^{アド}し時代子。由性法師^ガ。其親族の娘と語^ハくる等は。父僧正^ハ。法師の子は法師^{アリ}。そ宜^トて。強^テて釈子と為^ハる。あ生^{ハシミ}は。罪輕^{シカロ}きを。世^ノ止事^{ムコト}れく。貴み用^ハられ。あ^リ釈子^トちの。此心を除^ス。敢^{アリ}。自法^ハ魔道^ヲ墮^ス。りと思^セ也。

流を。尔^ハ劫河砂と多かる^ハき^シ然^ハみを記し出^ハじあむ。まく、楞嚴經^ハ。若不^シ斷^サ姪^ヲ修^ム禪定者。如^シ蒸^シ砂石^ヲ欲^ス成^ム飯^{。經^{百千}}劫^ヲ祇^{名^ハ}熱砂^{。何以故^ハ}此非^ム飯^本砂石^{成^ム}故^トも云^ヘア。姪欲心の少^ムも有^ム限^ア。決して佛道を成^さざ^シの誠^{アリ}。斯^ハ真^ニ佛道を成^ゼる人は。古今^ハ希^ニ流^シく^ソ覺^ハ流^{。抑^ハ姪心といふ情^ハ。然^ハう^ア除^ス敢^{アリ}。流^物ある事^ハ。如何^{アリ}縁^{アリ}む^キ云^ウ。此^ハ人と有^ラむ者の。子孫生^ムま^キ根元^ハ道^ア。此^ハ天地を鎔^リ造^レし給^ヒし。天皇祖神^{ミオヤガミ}と御座^ニ。二柱產靈^ヲ大神^の無窮^{トコトハ}小人草茂^ヲ造^レ出^ス給^フと共^ハ。各^々賦属^シ給^フる。本性^ハ最^ムの物^ハ。此^ハ本性^{を失^フ}隨^ハ用^ヒて。子孫}

を生くせしめ給ちむ料タメ。彼一物モ墨丸とを具備して生アレし
免給へきは此ニ物を具して生アレらむ程の人も小兒を除て。
弱ガキよア老カヤ至るまで除ゲムと欲ホリ候とも其は大海の津ウチ。
汲クミ于サむと欲ホリ候如き癡事シテにて決して除ゲム。甚イトも貴く辱カネシ
き賜物タマモノの本情モトツコロあアかし。

但し希ヒ少シは彼二物を有れがら然る性コトあき人も有底由アリ
れど決めて虚言ウソゴト少シや有らむとさす思スルを若實モレコト少シ然る
人ヒトも有らむ其は不仁物カタハモふぞ有り故俊成卿歌コヒ戀コヒせぢは
人は情ナガケ無ナカニまし物モノは哀アレも是よアそ知スルまゝ藤原隆信
朝臣アマミニ歌ウタ色カラ少シむ心ハを同じ昔カレみて人のおアラさ小老カイを

知るうれヨハと詠ウタあるそ面白かりり也。

然ハシ少シ釋家シキ道シキ此性コトを魔マジと名けて天皇祖神ミツミカヤガミの賦命ミツザ少シ戾モト足シテ子孫生ハシの道シキを制シテムと不姪アラタの戒カギを立タマるは左道シキ炳然ヒツル
た物モノ少シ非アリや。

但し僧尼シヨウニをば不姪戒アラタカギを立タマれど俗人ハシ邪姪戒アラタカギと立て
上アマ引アマる楞嚴經ロウエンジ少シ衆生ハシ其心ハシ不姪アラタ則シテ不隨アリ其生死相續シテ
と云ハシれども其ハシ姑ハラハラ衆生ハシ少シ有らむ間ホドを云ハシへるうて
遂ハシ少シ衆生ハシは更ハラハラあり草木國土悉皆成佛ハシとて佛祖生イキ替ハシり
死替ハシア千身万變ハラハラして皆ハシその道シキ少シ導ハシい入れむとの本願ハシあ
れむ次ハシ少シ釋子シキゾと為ハシして不姪戒アラタカギを持タマめ世人ハシ人種ハシを皆

盡らむと云ふ道ある事を孰く辨ふ。まし。

然れど古には佛子也。此性子去^{サリ}、敢^スアリむも。然有べき理^{トナリ}。其ハ佛子の去^ス、敢^スアリム。其法を立^{タマ}る佛祖も。久遠劫より成佛して居ある。機を見て當時の世^{ソカミ}を出^テりと。口^ヲは言^シう。其は出山後の幻説^{ハニコモ}有れ。山^ヲ入^ガ正^シ程を。妻を三人もちて。子^ヲも三人生^レし。先^カ中^カも羅喉羅^ヲ也云^ジ。子^ヲは成道と稱して。山を出^テる後^モ。令生^{コリ}し成^セや。自身既^ノ自法^ヲ破^ル。戒の^人般^若も更^多ア。自得して。釋魔と成^ルむ事は。言^はくも更^多ア。

羅喉羅^ヲ出生は。出山より六年後ありた。此等の事は^悉く。

印度藏志小論^ハ。其略説^{アラビン}も。出定笑語^ハも云^れば。彼書^ドも小就^{ツド}て見^{ベシ}。凡て大小乘^ハ眞の經論^ムといふ説^モ。俗の癡人^{レーピト}等^ハ説^フ。佛を本地^ヲにて。神は垂跡^アと云^フ。是^シ此説^ハ如^クは。神も佛の隨意^ハ小成^シり。是^ハ彼男易女会^の二物^ヲ付^セ。姪心^ヲ賦^セ。頭^ヲ髮^ヲも生^セ。又^ハ生^キあむべき事^ハ。何^モて佛祖そ^ハ身^ヲ始^メ。總ての人^ヲ身^ヲも。神^ハ心任^ハ不^ス造^ラ。あ^セて。彼魔羅惡者^ハ。ふど卑^メひ^シも。其物^ヲ付^ケて。其事^ハ苦^シ。髮^ヲも生^ジて。生^レ志^先。其^ヲ幾度^{イフタ}とれく剃^リ。えう^ハき勞煩^ヲも為^ム。又^ハ神通^ヲ以^テ。出^セしむる者^ヲ。其戒^ヲも持^ト。除^ケく。悉く煩惱魔^ヲも除^ケく。

傍き小。何とて其^ツを去るあと能^ハま。生涯^{ヨノサギ}其道^ハ惑はしめ。終
みは妖魅^{イガモ}の悪道^ハ墮せ志む也。彼二物の有る^ハ故^リ。姪欲
心^ハ有れるを。其^ハ神乃^{ムスヒ}產靈^ハ隨意^{ハシタ}小造^ラ志^メて。不姪^ハ戒
を立^ムるは。い^ハ小不法^ハ甚^{ハシタ}よ非^ハセ^ル也。其^ハ不法^トしも
知らざ^ム也。頑愚^ハ非^ハして何^ガ是^ヲ以^テ。神^ヲ天地万物の
本地^ト。佛祖^も神^の產靈^ハ憑^カ志^メて。生れ出^ムる物^ハ除事^ヲ
知^ル。姪心^ハ決^キ志^メて除く^ハきうらぬ理^ハも辨^フ廢^シ。余^ハニ
凡^ス此道^ヲ邪事^ハ如^ク云^フ道^ハ。其道^ハ取^カ志^メて古^ソ。正
道^ハ云^フ。神^の道^ハと^トと^ト也。忌^シた邪道^ハも^ソ。神國
小生^キて。神^ハ御^ミ畜^スと有^ム人は。よく此旨^ヲ辨^フ法^シ。但^シ

此^ハ庸人の餘^{アリ}。小事を辨^ヘちて。歌文詞章の學^ハみ耽^ス
アリて事識^{コトレリ}をうし。口^{アリ}は和學と稱^セれども。古道^ハ志^{アリ}。
歌物語^ハ佛緣^{アリ}。淫^ハと^トアリて佛意^ハ入^カ。博覽^ハ誇^{ホコ}る。貢
高我慢の魔縁^ハ引^カれて。其道^ハ入^ラむ^シ欲^ス。欲^ス者^多く^シ。
傍^{カタハラ}よ^{アリ}見^ルが^ハ哀^{ハシ}堪^サき^ハ。千^リ一^チも然^サる徒^ハ悟^サめる
事^モ有^ラむ^カと^ハ誨^サしれく語^ハみて。眞の物識^{モリシヒト}人^ハ云^フ語^ハ
を非^ダうし。猶此書の末^ハ論^ハ小^シを見る^シ。
上^{アリ}小論^ハ如^ク。姪心^ハ極^カ志^メて除^クれ^バ。人^ハ眞の道^{アリ}
ば。佛子等^ハい^ハ。外面^{アリ}然^{ハシタ}事^無らむ^カ。清僧^{をう}して。
世^ヲ振^{フル}舞^{ハシタ}むも。内^{アリ}實^ハ不淨行^ハ多^カ。傍^カき事^ハ思^ハべし。

然れど大納言雅俊卿は。一生不犯の僧を擇むれしやな。逃ぐ
る法師も有しれど。

此は宇治拾遺物語也。京極の源大納言雅俊といふ人有け
ど。佛事を為らきり候。佛前にて僧より鐘を打せて。一生不
犯ある故擇びて。講を行ぢれりも小。或僧の禮盤より上りて。
少しひ顔氣しに違ひる様ふ成て。鐘木をとどけて振廻して。打
もやうで。暫はうと有りれど。大納言いうふを思ぢれりる
程也。やゝ久しく物も云はて。有けりば。人とも覺束あく思
りる程也。此僧かあゝたゞる聲みて。皮都留美はいのづ候。
ほゞと云ふ。諸人頗る放ちて笑ふ。一人の侍がて

て。皮都留美は。いくお許をみて候ひしそと問ふる。此僧
首をひねりて。だと夜部も爲て候ひきせん。大方とよみ
合へど。其紛きふ早う逃ふたりと有り。然れど此ちいせ正
直なる僧あとしと通えて。一生不犯の僧を擇ぶと聞て。破
戒の罪を恐悚心す。と乱し逃る。取乱さず。不
犯顔して居らむ法師。一人も此犯を為さるは。有さざ
りむと覺也。其を太秦比牛祭文よ。長久遠久拂比退久倍支
者安里坐て。種いの惡事。ども舉くる中。瘧癱狂傳死病。鐘
樓法華堂乃加波津留美聖教破留大鼠小鼠女。云々と記し。
長久遠久根國底國迄拂退久戸支者也。と有を見て。此行

法師の常ツネふ有し事は知らシテ。此文は横川の源心僧都
が作とも。高野比空衆僧都の作とも云ひ傳シテ。何様ふも
舊き物ツレモノにては有リ。ア。

あく希ヒふは強ヒロて勉メシテ。一生不犯あるも有り免タダど。只慎タダソシみさ
る許バカすマサニ。蘊魔煩惱魔を免タマフれ。其情の根を斷タナハて失ハシムひ終絲
ば砂石を蒸ヒヤウして飯と成シタむと欲シテる如く。百千劫を經タマハとも
成道せば。魔道を免タマフれ。或カタチも云シふ。自業自得果タマハる哉イカ如何ハシマとせ
む。此コト子就ツキて思シテ。古今著聞集タマハ。南都ミナミノシテ一一生不犯の尼有リ
ア。遂ツコ小惡アレザ様シマツなる名立タマハる事も無ナシて止マシタア。臨終タマハいふに有
らむ。世ヨリ有カタ可シ例タマハ小人ヒト云シル旅程ルート。病クモリを受マシタて大事オシ成シタ。

られむ。善知識シラフ比シテ為スル。小僧シテ一人請シテじて。念佛スメを勧タマハる。其
尼念佛タマハをば申シタびて。麻羅ラの來シタる。そや。麻羅ラ來シタる。そや。と云
て終コハ止マシタ。一期コハ間シテや。ちく。思シテひととては侍タマハれ。心
中コトハふは此事カタチ故タマハ係タマハ有カタチ。け。是タマハかく終コハりの言葉コトバふも云シテ。免
何事タダも只タダ心ハの引方ヒカタ。善惡ムクイの報サダを定シタむ。能タマハく用心シテ有
る。徳タマハき事タマハふこそと有リ。

まく同書シテ。此頃アラタニ一生不犯タマハ尼アヒ來シタ。いまアラタニ齡ヨハヒの盛サカリふて。見
目メあとアヒ清氣キヨゲありタマハア。世ヨリ状ザヤも侘ワロしからシテ侍タマハ。物モノ詣タマハ
あらる時タマハ。阿流僧アリ此シ尼アヒを見て。堪シタがく艶エヌ小タマハ思シテ。能タマハく
何タダせむ。思シテ。餘アヒ正アヒ小タマハ家カタ見て置シタ帰カム。よりタマハア。其後思

ひ忘ワヌふ事も無く。心と心小懸カハ。日數カズを送り候。い
かふも然サて止ヤムき心地コトチもせぬ。人知シメぬ思スルあるべ
て。彼尼の許モト尋タツネ行きぬ。此僧見目事シメから。世ヨニ尼ニ似ナリ
れど。尼比效ナレを爲ヅカて仕ハセられて。隙ヒヤを伺ウカむと思ハシメて行ハ
正カタり。彼所カよ物申マサムと按内カタハシマけバ。やがて主アルジニ出
て。誰タレふうと問ハセ。此僧胸ムキうち騒ソラだて。弥イヨ堪タクぐあく思ハボ
候ハシメを念メモリじて。別の事ベタは候マタタキ。世ヨニうはの空ツブれるやう小
侍ハサウエへども。宮仕ミヤヅカ候マタタキら年ハサウエとて。參マサニて候マタタキ。年ハサウエ頼タタクみて
候ハシメへども。宮仕ミヤヅカ後ハタハタれ。賴タタク方カタれき獨人ハトリウドふて候マタタキ。男空ムナ志シテく成ハシメし
日ヒあり。狀ササを替カヘて候マタタキへ。尋常ヨノツキの宮仕ミヤヅカあどマダも。叶マタタキまじく候マタタキ

アバ。箇様カの御遁世ハタハタ御邊ダリ。自オノから召メシツカ仕ハセ候マタタキ事も
や候マタタキとて。參マサニて候マタタキありと云ハセ。實ゲニもうはの空ツブふを覺
せれども。指當サレアタりて。人も欲マタタキでシテる。其心ハシメ底シタをば知ハシメら
候ハシメども。物モノうち言ハセある狀ササふども。優氣ハサシダあれど。左右ウヂれく受ハシメ取
正ハシメり。此僧マタタキが爲ハセらせある心地コトチして。末タタキも賴タタク母ハタクしく
こそ思ハシメけ。宮仕ミヤヅカふうかひぐハシメちく實ハシメよあ。あうも又女
とも覺ハシメえ。健ハサカある方カタへ有ハセて。事ハシメ小置オキ大切ネムゴロあざれど。
一筋スヂ小家カタの中ハ事ハシメいひ付ハセて。又ハシメき大事ハシメれ者ハセふてぞ侍ハセり
る。斯カクて今年ハサウエも過ハシメぬ。今は是程ハシメの大事ハシメの者ハセよ思ハシメられぬ。尼ニは
只タタヨ世ハシメ渡ハシメ。小ハサカも不足ハシメ無ハシメれど。心ハシメ中ハ乃ハシメ本意ハシメをば。兔角ハサカ思ハシメひれ

まぢみて過しり候。次の年は冬の頃よアは。夜寒つらむ。今は我衣の下小も寝よれど云へは。嬉しき事限ア有し。然小付ても。弥く心せ動く古也。靜がさり坐は。猶とかく心よ伺ひも。其年もくれぬ。此尼正月七日も。別して持佛堂ふ候ひて。齋勤した時はうどぞ出むべるにて。其間の事ども。此今參定の尼ふよく云ひ置て。朔日より佛前よ行ひて候リ。七日が間勤よく為て。八日は例の如くみて有り。日比ある精進ある上。小様くせ勤を小身も勞れり。其夜をあらとと見て寢たり。此僧思ふやう。數ふれを今年は三年ふれ正ぬ。同事を旨としてかくも待る。如何ふも有

らば有れ。只今取付て本意を遂ぐむと思ひ。よく寢入る。尼の股を廣げてはさまどぬ。豫てより巧み設する事あれを夥じた物を苦もれく。根本まで突入りて。大だふねびえ惑ひて。何といふ事もあく引外して。持佛堂の方へ走て行ぬ。此僧のちれ然思ひがる事を今はよき事有らじ。如何せむじる。胸騒まで。角かどふか。はて居て聞ルは。此尼持佛堂ふて。鐘をあまく敲き。丁くと物騒がしけ少打て。何せやらむ物申に音して帰れた。此僧いりかく耳聞むべらむ。弥く咎遁れおべくも非ずと思へ候。此尼思をんふ氣色悪うらで。何所ふぞと尋ぬる聲はる。嬉しく覚えて。此う

候と答へられど。やがて股を廣げて顔をはざ。懸りて立きば。
返ちぐ思ひの外小覺えて。やがて押臥せて。年もうの本
意を思ひて。傍に迫伏せて立。僧も何とて一番小は引抜
きて。持佛堂へも入給所あると問ひれど。其事あり是程
心地よだ事哉。いかゞは我をかどふては有べき。上聞を佛
小參らせむと。鐘打鳴して參りたるそと答へる。其後
打解りて。隙もれくあられり。生ば。女男小成てぞ侍ける
とも有ア。此を建長六年小記せる書ある。此頃と書出さ
きば。撰者は近く見聞する事と通え。事は有。やうを考
ふる。謂も法一向宗といふ宗の人の。何もうも上分は。阿

弥陀佛へといふ趣。よ見ゆるは。其宗は尼ありしふや。
空華老人の天狗名義考よも。始ふ舉くる楞嚴經の文を引て。
中古よア戒律比法廢れて行をれど。剃髪染衣して沙門の形
と成り。僧正上人長老和尚あとく名乗れども在家所持比五
戒八齋戒を。とも持ひ事れし。況や沙弥戒比丘戒をや。何あ
智者行者と云へども。姪を斬る者希れア。紫金臺寺大僧正
の千手三河を寵し。一乘寺僧正増譽比。呪師小院を愛せよ
如き。宜しく竝せ按ふ法し。魔道の盛あるも。宜れりと云へど。
千手三河が事も。古今著聞集小見えて。男色比姪あア。

其文小。紫金臺寺御室ア。千手といふ御寵童有り。見目よ

く心さま優也。けど笛を吹き今様あど謡ウタりれる。御最惜み
甚イミじか可シる程ハ。まゝ參川ミカハといふ童初めて參ミキハりり。或
箏サウは琴コトひき歌詠ハリみ侍リり。此もあゝ寵イモシて千手チホゲきら
少劣スミシオトリりきば。面目ロクメあしとや退出して久しく參ミキハり。或
日酒宴の事有アリて。様メシくは御遊アツシテび有アリ候スルよ。御弟子の守覺
法親王アドモ。其座アツシテ御坐リ。千手チホあど候スルはぬやらむ。
召メシて笛吹リせ。今様れど歌ウタをせ候スルはゞや。申さシせ給スルりき
む。即ヤガテ御使ガムツカヒを遣シ。召シせり。此程所勞の事候スルとて參ミキハり
けど。御使再三小及シタマニれど然のみを子細申スルかとくて參ミキハり
小たり。紋紗の兩面ツブリは水干スル。袖アラタむはらこた雀スズメは居リ。

をぞ縫スヒさりり。此紫ムラサキのちそあは袴ハカマを著スル。殊コト小築アザヤカ
ぞだめシテとも物を思入リる氣色現アラハて。あめカヘて返リてぞ
見エく。御室カハロは御前カハツ。御盃カハツをさす。られある折フリて有リれ
ば。人ヒ千手チホ小今様カハツをあつ。免スルれば。過去無數ムレシユの諸佛ツボクふも。
捨スルられある哉イカニ。如何シテせむ。現在十方ハチノハ淨土セイドウふも。往生スル。悔スル
き心ハシム。あとヒ罪業重カモくとも。引接スルし給スルへ弥陀ミダ佛ボトケ。とぞ謡ウタ
り。諸佛ツボクふも捨スルられと云ふ處スコシをむ。少シかちシ成スルやうふぞ
云シける。聞シ人ヒトみを涙ナミダ。流スル。興宴の座シテも事スルさめて。お先
正カタ返リり。是シば。御室カハロを堪シ。承スルさせ給スルて。千手チホを懷スルせて。
御寢所カハツ小御入スル。有リ。滿座ミツシテいみじシが。言ハシムりける程ハ。其夜

も明ぬ。御室御寢所を御覽じられむ。紅の薄様は重ありと
筋を引や立て。歌うたま御枕屏風ノ押付て有り。尋ねべ
き君れらませばおひてほし。入ぬる山は名をばそれとも。
怪くて能く御覽じけれど。參川ヶ筆あり。今様小めで
させ給ひて。又舊き小御心の赴くを見てかく讀侍どりる
小こそ。儲御尋有りれど。行方を知らむ成ふり。高野より上
て。法師よ成けるとかや聞えけりと有。古事談小。高野
比御室の御寵童小。常在參河といふ有りて。それらよ琵琶
箏あど哉習をしめ給へる事ありて。其本注。高野御室と
は。覺法を申て。白河院天皇比御子ふて。師子王宮とも申し。

常在を後小法眼よ補せらき。三河を後小三河聖人とて。高
野山に住せる由見えあるは是ある。高

呪師小院ハシナカニが事は宇治拾遺物語小見えて。此も男色比姫あり。
其文を畧見て引うは。一乘寺は増譽僧正也。經輔大納言の
子あり。貴くて活佛あア。二度大峯よ入ア。蛇を見る法を行
ひ。龍の駒を見あぞして有れぬ有状をみて行。旅人あり。
此僧正呪師小院といふ小童を。餘て小寵愛して。只法師小
成て。夜晝放き。おきて有と有り。成童い。候べた。
今あばし。斯て候は。やと云けるを。僧正れ不最愛さ。小。
ど成きと有り。れど童あぶく。小法師よ成り。不。儲過る

程小春雨打そりたて徒然なる。小僧正人を呼て。呪師小院
が兒ありし程の裝束は有りと問ふ。小納殿ういまゞ候
と申けれむ。取て來よと云ふれど。持て來れむ。此を著よと
云きりて。呪師小院見苦しく候。あむや否り。旅哉。只著よや
迫らぬきも傍よ立忍びて。そぞれたて出來りる。小露昔
小かはうけるを。僧正うち見て。かいを造られけり。小院も
打泪ぐみて立正り。旅よ。僧正一曲哉と望れり。琵し覺
て候とて。一拍子いと面白く舞り。小僧正聲を放ちてぞ
泣きける。猪こち來よやと呼よせて。搔撫却。何し小出家を
させりむと悔きりれど。小院もゆきはこそ。今志はしと申

候ひし物をと云ふ。裝束ぬがせて。障子内へ具して入れ
小り。其後もいゝなる事加有りむ知らどと有り。○猶男
色の事は北村季吟の著せる。岩ほゝおといふ書有て。古今
集より以後代々撰集。多く物語書に中より抄出して。三
十餘人比事の見ゆる。大抵を法師あるふ就ても。此行を。
僧徒の專とせし事と思はる。此外和漢の書に記せる事多
く。うど。されみを引出矣。

上小舉ある事實とも参考へ通して。世に法師等の魔縁を
脱れく。原も。希少の事を悟る。魔縁を脱きざれを。悉く魔
道す墮て。妖魅の部属と成りむ事疑ひなし。其やうて自得果

あはる如何。アセム。勿れ忌くした業報あはるも。

猶その魔界ニ落^{カチ}ル底状也。次^ク記せる事或見て知る法し。
而て釋迦^ハ境界小墮入^{カチ}る者は。三熱の苦^{ハシミ}とて毎日小三度鎔
銅を飲み。種^{サカ}の火攻^{ヒザメ}逢^{サカ}ふといふ事は聞^キゆるを。前^{サキ}は釈
子小成生^{サカ}者と云^フども。神の產靈^{ムスビ}不依^ハて生^ハ出し者ある小。
神の道^ハ死後^ハ然^{サカ}刑を設^ケけて。罰^ハ給^フ事は證^ハ也。古書
小曾^{カツ}見^{ミエ}ざれむ。決めて俗^ハ妄說^ハこそと思^フレシ。和漢
古今^ハ實事^ハ正^シしく其事の聞えて。更^モ浮^キる説^ハ小非^{サカ}され
ば。淡^ク考^カか^ム。實^ハ本因有^テ。彼界^ハ入^ル者は。其苦^ハ受^クる
あと。灼然^{イナカル}き事^ハ小^ハも有^リ。其本因は。因縁僧護經と云^フ物^ハ

見^カ。其趣^{ヨリ}を僧護比丘とて。佛戒を持^{タマ}だ放逸^{アヘ}て。種^クよ
教^ハふれど用^ガする者有^レ。し^ハは。佛祖のそ^ハ強^{アハキ}。戒を持^{タマ}めむ
とて。彼比丘^ハ伴^ハ失^ハ。路^ハ迷^ハへる程^ア。破戒の者^ハ鬼界^ハ
墮^ハて。苦^ハ受^ク院^{アリサマ}有^リ。變現^シして見せ^カあらが。本因あり^リ也。
因縁僧護經といふ經也。三藏聖教目錄^ハ。小乘綏單譯^ハの處
又^ハ出て。信^ヒイ釈迦氏の遺事を記せ^ル物と見^カり。凡^テ佛經
は。大乘部^ハ。釈迦氏^ハ本說甚^シ希^カれるを。小乘部^ハは。實^ハ
遺說^ハ存^セ。其由^ハ印度藏志小論^ヘ也。
其文^ハ。僧護比丘失^ハ伴^ハ。涉^ハ路^ハ未^ハ達^ハ。聞^ハ鍵椎聲^ヲ。尋^ハ聲^ヲ向^ハ寺^ハ。路^ハ值^ハ一人。
即^ハ問^ハ曰^ク。何^カ故^ハ打^ハ鍵椎^ハ。其人答^ハ曰^ク。入^ハ溫室^ヲ。浴^ハ僧護^念言^ヲ。我從^ハ遠^ハ來^カ可^ハ。

就僧浴。卽入僧房。見諸人等。狀似衆僧。共入溫室。見諸浴具浴衣瓦瓶瓦器浴室盡皆火然。其時僧護見諸比丘。共入溫室。入己火然筋肉消盡。骨如燋炷。僧護驚怖。問諸比丘。汝何人。比丘答曰。汝到佛所可問佛。便捨寺。跳走進路。未遠復值一寺。其寺嚴博殊能精好。亦聞鍵椎聲。衆僧食飯。食器敷具。人及房舍盡皆火然。復見一寺。諸食器中盛滿鎔銅。諸比丘等皆共食己火然。咽喉五臟皆成炭火。流下直過云々。詣祇洹精舍。問佛。佛言汝所見是地獄罪人。迦葉佛時出家比丘。不依戒律。順己愚情。以僧浴具及諸器物隨意而用。持律比丘常教軌則不頒其教。從迦葉佛涅槃已來。受地獄苦。至今不息云々。是故我今更重告汝。當勤持戒。頂戴奉行。

と見えり。此を佛祖の例比神通方便をもて。變現して見せある。併添こと。印度藏志まゝ。出定笑語よ論へる。其弟の難陀が出家せむ事を辞ふを。天堂地獄れ有狀を。變現し見せて驚怖せしめ。遂小出家と成る。方便と。同じた字以て悟べし。諸比丘等よ問へを。比丘等が答ふ。汝佛所了到立。佛小問ふ。後しと曰。し。也有るも。正小同じ方便あり。あゝ迦葉佛と云ふを。此も佛祖の方便。了其道の新治道。からぬ證。よとて立くる。過去七佛れ中みて有名無實ある。幻説の佛名ある。あと富永仲基が説有しより。心智き人比普く知る事れ。徳をや。然る實取き佛名をいひ出て。其時よりと云。併添子

て方便の變現あるあと殊小著明あざかし。

其はまぢ諸越みて正子これ事實の有しは唐法華傳といふ書。隋相列僧玄緒有同房友道明者。以大業元年三月於本寺卒。其年七月玄緒因行至郊野日暮忽遇伽藍便往投宿。至門首乃見道明從寺方出儀容言語不異平生。遂引緒至房緒私心怪之而不敢問。至後夜明遂起謂緒此非常處慎勿上堂。至曉鐘時復來語緒不許上堂而形神頓消衰顏色殊改。明去後緒遂祕往食堂後窓邊觀覩其事。禮佛行香皆如僧法。昔貢高逝者多列坐而在。維那唱施粥已卽見有人昇粥將來。粥皆作血色行食遍並見諸僧舉身火然死轉闕絕蹕地如一食之間。維那打靜諸僧

一時無復苦相緒駭懼還所止房少時明至轉更憔悴緒問之明曰此是地獄苦不可言と見えり。

かゝる類の事共も法苑珠林甚多く舉りて披見べし。はく皇國籍ふも此ういと能似くる事とも有りそは今昔物語集小東大寺より住りる僧の花を摘みて東は奥山に行ひて。夢け様小思えて歩み被行ひれど我は何不成ぬるか。迷神小值くる者こそ此を有れき何處を行ひ有らむ怪くも有うれと思くぞ行ひ隊アリ。

迷神やは孰などの類をいふ人故途小迷はまきをれど字

治拾遺物語。今昔物語等小。左京属俊宣と云々る人。古の迷
神ノ惱まされし事見えり。

平の流瓦葺は廊の様小造ある有て見れも隔てあた僧房は
様あり。恐く内ふ入て見れば東大寺みて死し僧有り。恐し
き事限なく。早う此僧は惡靈あどふ成て。住む處あてりと
思ふ。此死する僧の僧を見て云く。汝何として此處みは
來ざるぞ。此を人れ輒く來べき處非也。希有に事うれと。此
行為の流僧答云く。我花を摘むが為小。山行於る小。我子も非
之恍る心地して。かく歩み來於る也と。死し僧云く。かく
對面しあ流極めて喜ばした事ありと。泣こせ限なし。行

る僧極めて恐思へども此對面しあ流も喜ばした事也とて
共小泣く。死ある僧云く。汝窪く隠れて。壁の穴あり密小臨
きて。我が受床處の苦を見よ。我寺小在しと。徒小僧供を請
食ひて過ぎ倦。流日は入堂をもせば。多く學問をも爲びし
て在き。其罪小よどて。毎日小一度堪がふを苦患せ受るあり。
漸く其期より至りと云程。此僧の氣色は只替り小變じて。
憮ましげ小恐ろしげに成ぬ。此を見る小今此僧も堪難く思
也。本の僧云く。疾く隠れて此壺屋に入りて。壁より臨けと云
所ば言ふ從ひて。這入て戸を開て。壁の穴よど臨りを忽
唐人比姿の如き者ども。極めて恐しげあるが。額小帖額しさ

る四五十人許。空より飛び如く下りて來ぬ。まが盜人を打於
機を忽ち土を掘て立て於其後火を大にす儲けて。鏤み居候
て。銅盆入きて湯小涌しつ。其中に主人と思した人三人有て。
胡床子著き竝より後赤き幡ども立竝。其氣色を見る
小更に此世の事と思えど。此人極めて恐氣ある音成もて。
疾く召出よと云へば。使二三人はりて走分きて。此僧房の内
より入れて暫計あれど。十人計け僧を縛の繩をもて。綱列候て
將出あり。其中小見知あるも有り。見知ざるも有り。され此機
の本小將寄りて。機あと小結付於機員を。此僧どもの員は
如く有きは餘あるはなし。皆動べくもなく寄せ於其後大お

る金箸をもて。僧の口小入きて。口有るかぎて開きぬ。其口小
鐵囊小銅湯を入れ。僧共は口あと小宛て入れば。暫許あ
りて。尻より流れ出て目耳鼻より焰いで。身の節あと小煙出
て。各涙を流し。叫て音悲し。僧あとも皆次第飲ませ畢
終は皆解免して。本の房へ返し送り。其後此人ども空
小龜昇りて失せぬ。此僧此を見て生あるふも非也。為方あく
衣を引纏じて臥す。然る間房主の僧來て。壺屋を開れど。
起上りて見る。術无き氣色みて。見給ひたやと云ふ。此僧云
く。此を何として何きの程よ。此る苦患を受給ふぞと。房主
は僧云く。我死てあればち此所來て。此僧房不住あり。寺小

さて徒みたま小信施みやげを受うけて。償そなへふ方無なきしなし依よて。此苦を受うけるなり。
速はやく返もどし給たますと云いけれど。此僧其處そのところを出でて。道のまでく小返もどげ
と有あり。までく砂石集いさごあつ小。南都の興福寺こうふくじより學がく匠じょう有あり。佗界ほかの世界
せち。彼生處そのところを床ゆかしく思おもふ弟子みこありたりたり。或も時春日野かすがのにて。師匠しのう
小行合こうぎあぬ。和御房わごぼう。已そが生處そのところを不審ふしんよ思おもへ。いざ見みせむとて。
春日山北奥きたおくへ具そなへして行く。小興福寺こうふくじの如き寺てらあり。三面の僧
房おとこあり。彼師かれしのうが房おとこ呼よ入はいきて。此不居すまて。わが有あ狀じょうを見みよと云
ふ。さて佛事講行ぶつじきこうぎょうと覺おもし。小並居おほおほおほおほ居ゐて問答もんとうにること常つねけ如ごとくし。其後空うつよよ正ただ
講堂こうどうと覺おもし。小並居おほおほおほおほ居ゐて問答もんとうにること常つねけ如ごとくし。其後空うつよよ正ただ
足あある金かな。ふざくふざくと見て零さる。小銚子こひき土器體どきの物もの也や。

さて落ち獄卒ごくそつの様ようある者もの落下おちせて。金かなの中なか小銚子こひき湯ゆの沸わ
るを。銚子こひき小汲くい入いきて。土器どき小こて押廻おこなし。僧等そうとう飲くあむる。小術こじゆ
あげる氣色きしき然ぜんがら。皆みな飲く。頓とんて身みは燒失やげつけせぬ。とばうと有あて。はく本ほんの如く鯀生うおうして。我房われふへ帰かへり。我等名利めいりの心こころよ。佛
法ぶつを學がく行こうせし故ゆゑかくる苦くるを受うけるなりと云いくるを見み聞きて。
弟子みこは僧そうも。學がく匠じょうふて公請こうせいあと勤こまり旅たび。此こよよ發心はつじんして。修
行こう小こ出でて。何處どこともれく逐電よくてんしけしけり有あり。此文この其苦界そのくわいを
春日山の奥おくありたりしと云いひ。上うへある法華傳ほけでんの文ふみも。郊野こうやあり
しと云いふれど。此こ共とも小我人わがじんの見みむと欲ほするとぞも。其縁縁れく
ては見みらぬ處ところ非まず。までく元もとよよア神じんは御ご態たいを。かくる苦界くわい

を設け置給ふも非ず。即その因縁も。佛祖始めて地獄の苦相成説し以來。それ説了應じて妖魅乃變現せるなり。此を佛書小邊地地獄と云へ。其は新婆沙論小邊地地獄或在谷中或在山上或在廣野或在空中と見えらる是也。

空華老人も。法華傳の説も。砂石集の説とを。僧護經引合せて。天狗の苦相正しく符合。尤信ち候不足れど。又その住處も。人界と雜はて居て。常人の見る所非也。華嚴經も。夜叉宮殿與人宮殿同在一處。而不相雜。各隨其業所見不同。と云へる。小全く同じは。法華傳は文小貢高け逝者多く列坐して在といふ。貢高我慢を天狗の業因あるが故なり。

まく付法藏經小堂閣嚴飾衆僧經行禪思。日時以到鳴槌集食。食將欲訖爾時飾膳變成膾皿とある文も。天狗の苦相似たりと云へる。實然俗説あり。まく佛者古き諺也。現在甘露未來鐵丸とも。智度論よ。以貪著美味故當受苦。洋銅灌口噉燒鐵丸ぞ毛臘也。

但し佛説小因りて出來ある界はみれら矣。元より神界あり。まく仙界も歎也。其宮殿まく野かも山も。何處にも有りて。是は現人の宮殿家居と同く。一處不も在れど相雜らば。其縁あくとは常人小見ゆる事あく遇ふは見る人も有れど。所見同うら矣。隱顯定あきこ也。神境の事え。神世の海宮は有狀

をもて知。仙境の事は諸越桃源の故事などを以て悟。其心を擴めて佛說より出來し妖魅界の事をも辨ふべし。神境や仙境と比事は古史傳より赤縣太古傳三神山考れども小委く詔せき。此書小は唯そぞ大凡云云けみあり。僧まゝ佛法小寺物を仕ふ者を死て後甚しき苦患を受ると云ふ誠有。此了就て今昔物語集小奈良大安寺の別當あるる僧の娘は許よ藏人ありりる人の忍びて通ふ程。互小去難く相思ひて有りれむ。時には晝も留。或時晝寝あく。アタラシ夢。俄に此家の内ふ。上下比人喧て泣合。何あきは斯も泣よう有むと怪れ。立行て見る。小舅比僧姑

の尼公より始めて有限りの人皆大ある土器を捧げて泣迷ひり。何あれ此土器を捧げて泣やらむと思ひ。慥不吉見れ。銅の湯を土器あとふ盛れ。打責て鬼の飲せむ。ふも飲べくもれき銅の湯を心を泣く飲あり。辛くちて飲果たれ。亦こひ副て飲む者も有。下は下衆子至るまで。此を飲ざる者なし。我傍小臥する娘をも。女房來て呼べ。起て往ぬ娘を不審す。小まゝ見れ。此女を大ある銀器よ銅の湯を一器入れて。女房とらひきは。此女取て細く勞う。けある音。詠さし舉て泣く飲め。目耳鼻より焰煙。出ぬ。奇異と見て立てる程。まゝ客人小參らせよと云ひて。土器を臺小居

あひて女房持來る。我もかゝ旅物を飲むべらうと思ふよ。奇異
くて迷ひ験ぐと思ふ程よ。夢さえぬ。驚きて見れる。女房食物
を臺小居あひて持來る。舅は方ふも物食ひ喧る音あり。其時小
思はく。寺は別當あれむ。寺物を心不任せりて仕ひ。寺は物を食
ふこそ有らめ。其がかくは見ゆる也。忌くあく心疎く
覺えて。娘の思はしさも忽失せぬ。然れど構へて此を食は
じと思ひて。心地悪犯由を云ひて。物も食はして出ぬ。其後を
遂小彼方乃行うべ成ふりと有ア。

此事は。宇治拾遺物語も出されぞ。校了文を合せ見て。多く今昔物語ふよとて記し給。

此を上ふ引くる僧護經。順己愚情。以僧浴具及諸器物隨意
而用。持律比丘常教軌則不順其教。從迦葉佛涅槃已來受地獄
苦。至今不息。云くあざい。僧等はそを口實とみて有る故ア。
それ即實の業報となりて。幽かく旅苦刑は出來て。死ぬれ
ばやがてそれ報を受る有狀を。あざむく藏人ある人は夢か
見はせるか。此藏人あざむる人を。何ある神の御靈をう賜
ひづむ。正テその有狀を夢を見て。疾く此女乃許よ行うべ成
しハ。甚も賢かう。此ふ就て按す。今世は僧等ふ。寺物を
用さる者一人やは有る。あこ世子在人の事欠くる状ア。法
師の女を妻とひるも多かる。其後世は業報乃程の。思ひあ

られて。いとも哀ありかし。

は。今昔物語集。比叡山。在し僧の山を去て。攝津國小行。妻を儲りて在ける。其郷にて法事行ひ。供養あどかる。夫は此僧を呼て講師とあり。此僧其行の餅を多く得れど。人も與へ置く。妻が此餅を益なく子共從者小食せむ。とは破集めて酒小造らばやと思ひて。夫の僧よかくあむ思ふと云へば。いと吉か。おむを云ひ合せて。酒小造りり。其後久く有て。其酒出來。らむと思ひて。妻往て壺の蓋を開きて見る。内に動く様小見。怪と思ふ。暗くて見えぬ。火を燈して壺を指入きて見る。

ふ。大きれる。小き蛇。一壺。小頭を指上て蟲めき合ふ。穴怖ろし。此をいふと云て。蓋を覆ひ。遂去。夫の僧。此由を語き。其を女。僻目。我行て見む。火を燃して臨ぐ。實。多く。蛇。有て。蟲く。然れど。夫も。愕。去りぬ。て壺。あがら。遠。搔。出て。野。小竊。棄。其後。一兩日。を経て。男三人。其壺を。弃。側を過り。小。彼。何の壺。と云ふ。一人の男。よどて。其蓋を開け。中。よて。酒。香匂。出。二人。此男。よかく。と云。寄。共。臨く。壺。小酒。一壺。入。あ。此。何れる事。ぞ。云。程。小。一人。が。我。此酒。呑。て。むと云へば。二人の男。野中。よかく。棄。置く。物。あれ。よも。只

ふては棄ステじ。定めて様ある物あらむ。怖ハラロし氣ケふ否呑イナノまじと
云クる哉。一人は男は極カタマリく廻上戸アツシヤドふて有りれど。酒の欲さ
ふ堪カタマリにして。其達を否呑ハラロざるぞ。我を譬へ何ある物を捨置
き流カタマリありとも。只呑ハラロてむ。命も惜フシうら文ヒトツウと云て。腰ココロ小付コサエア
ける具モを取出ハサシスして。指救ヒトツウして。一坏呑ミツツキて正マサニル。實マコトは微妙
丸酒ハラロて有れむ。三坏呑ミツツキて正マサニル。今二人の男も。此を見て。
其も上戸アツシヤて有りきは。欲ホシと思ひて。今日かく三人列ツツぬ。
一人が死れむふを。我等を見棄てむや。譬死タトヒぬとも。同くこ
そは死ふえ。いざ我等も呑ハラロてむと云ム。二人も呑ハラロ。世セ子
似ウ美キ。酒ハラロて有りれど。三人指合リシテて。吉く呑ハラロてむと云て。

大キある壺カチふて。其酒多か足りる哉。指荷サシニヤして家モテ持ハサシ行ヘて。日
ごろ置て呑ハラロるふ。更カタマリ事無りけど。彼僧ハ佛物を取集め
て。人ハシモ與アタへハシモ。酒ハラロ造シリきば。罪深シミカくハシモて蛇ヘビ小成ハシモけ。悔
恥ハシモ有りるハシモ。其後程ハシモを経ヘて。三人の男ハシモ。野中ハシモて酒壺
を見付ハシモて。家ハシモよ荷ハシモひ往ハシモる呑ハラロれど。美キ酒ハラロふこそ有りれど。
語カタマリアリ。旅カタマリを傳ハシモへ聞ハシモて。恥悲ハチタニみり正マサニ。此事はかの酒呑ハラロる
男ハシモ。また彼僧も語カタマリりるを聞ハシモ繼ハシモて。語ハシモり傳ハシモへ。此を思
文カタマリ姫カタマリ。佛物を量ハシモあく。罪重ツミカモき物ハシモありけどと有り。此も佛物を
仕ハシモふを。重カタマリき罪と立ハシモて旅戒ハシモの有ハシモるふ依ハシモ。然ハシモる報ハシモの怪ハシモしき
事ハシモも出來ハシモしれど。此も釈魔ハシモれ態ハシモあ旅事ハシモを云ムふも更ハシモあり。此

外ふも佛物を仕ひて。惡報を受くる事實ハ。書ともふ甚多く見えども。皆此ノ準へて辨ふべし。

天堂地獄の説も。元より曾て無事し事を妄説せ候。非也。印度藏志小委く論へる如く。天堂の説は。天御國の傳也。且く遺れる。基。地獄の説も。夜見國の傳也。片端遺きる。或取て。佛祖よアは遙前に出でし。婆羅門乃徒の説弘くを。佛祖其説を探りて。勸佛道の具ふ用する。地獄の説も。其修ふ用。されど。天堂は往生。れず生死を出族こと能はず。されば。卑しと為て。始めて東西南北ふ。各々佛の淨土ある由を言ひ出で。中ふも西方の極樂淨土といふ。往生を除す。最究竟は

往生とほる由を説弘く。勿る。其説實は如く成りて。天竺も更あり。東漸して。漢土小も此邦ふも。中古よりある。眞よ其説相小符へる。實事ども甚多有り。ある。甚も奇異かりり。天堂地獄有無の事は。既く谷響集小問曰。天堂地獄是有。是無。答。佛向無中説。有眼見空華。眼前見地獄。不避心外聞天堂。欲生殊不知。忻怖在心。善惡成境。但了自心。自然無惑。

以上の文は。佛祖通載ある説を採て。記せる由見えり。客疑曰。如言佛向無中説有者。似云實無天堂地獄。而佛方便假説。且止。小兒之啼。奈世不信佛者。往く作是見。撥遮因果。何答。金剛上味經云。佛告文殊。地獄門從何所起。文殊言。一切法是自念。

起相自妄念故一切凡夫自繫縛以繫縛故則是地獄雖非是有而令受者受彼苦譬言如人於睡夢中而見自身墮於地獄見百千万火所燒見捉其身擲鑊湯中彼人夢裏吼言極苦諸親問汝何所痛答我受地獄鑊湯之苦諸親言勿怖以睡眠彼人聞已方知睡夢虛妄如是知見身心得安非有自說言我墮地獄諸法皆是虛妄生故佛讚文殊善哉一切地獄如是見無有地獄と云へるを以て佛祖の本意を辨ふべし。

此經文を本書小金剛上味經と云れど藏經目錄小然る經名を無れば決めて金剛三昧經あり此も所謂大乘の經よ

て佛祖は時よりは最後小記せる外る故也有名無實は文
殊が語小託せれど誠を佛祖の本説あらすこと言ふも更に已然るは佛祖の道を弘むる小天堂地獄の舊説也元より信ず詠心あき物うら姑乃方便不通用ひる故也或時は其本心をも露したりむ但し其は眞に委した古傳説れき國小も有れば天堂地獄は舊説の體あらざりむ故不信ざりム然れど天堂の説を天御國の傳乃遺り地獄の説を夜見國の傳は遺するれきは本因は傳あき事ふぞ非也然るを信ぜぬ心あがら小種くその変相を付増して説くを成信じ怖怖く倫也然ちう小多有しうばかく本心を呈露あて實を天堂も地獄も無れど心惑ひの虚妄よ繫縛せら

きて然る處有アト。自身小其相を起ル由成論ハリム。其説の遺れ流を此經小撫ヒ收あるあらむ。其左まれ右ぬ。かく謂する大乘の經説ニ。佛祖の既ニ。天堂地獄の変相を睡夢ハ虛妄小譬シ。れど是小準ヘテ。極樂淨土ハ变相乃。虚妄ある事をも辨フ。而し。而し。而し。

而て佛祖の本心を。かく天堂地獄を無小斷せざる物うら。方便小假説せる。天堂地獄極樂の説相ニ符ヘ。實事小逢へる人の和漢よいと多かるは。何ある事ぞと考ふるア。佛祖世ヨ在しやど。其幻説を。天地と共に小立通さむ也。石凝せ脳心よア。其説ハ證セサムガ為よ種ハレ相を表現して示せざる成人既

小眞ハ説と信じざる故ア。例の魑魅妖鬼アド所得て。其態を成し。佛祖世を避リテ後モ倍々小彼突立する靈の凝堅まで。在世の間小説アリシ幻説を。實事小せむ也。種々に靈驗変相を現じて。人を其道小面向し矣。

蓋コレ其突立する意アド然るは地藏本願經ア。爾時世尊舒金色臂摩百千万億諸世界。諸分身地藏菩薩頂言吾於世教化剛彊衆生令心調伏。分身千百億廣設方便。或有利根聞即信受。或有善果勤勸成就。或有暗鈍久化方歸。或有業重不生敬仰。如是等輩衆生各々差別分身度脫。或現男子身。或現女人身。或現天龍身。或現神鬼身。或現山林川原河池泉井。

利及於人悉皆度脫。或現天帝身。或現梵王身。或現轉輪王身。
或現居士身。或現國王身。或現宰輔身。或現官屬身。或現比丘。
比丘尼。優婆塞。優婆夷身。乃至聲聞羅漢辟支佛。菩薩等身。而
以化度。但非佛身。現前汝觀吾累劫勤苦度脫難化衆生。其有
未調伏者。時汝當憶念。吾在忉利天宮殷勤付嘱。令世界衆生
悉遇佛授記。爾時諸世界分身地藏菩薩。共復一形。涕淚哀戀
白佛言。我從久遠劫來蒙佛接引。獲不可思議神力。具大智慧。
使我分身徧滿百千万億恒河沙世界。每一世界化百千万億
身。每一身度百千万億人。令歸敬三寶。唯願世尊不以後世惡
業衆生爲慮。爾時佛讚地藏菩薩言。善哉。吾助汝汝能成

就久遠劫來發弘誓願廣度。將畢證菩提。と云し。也有を思ふ
べし。種々小身を表現して。其道を弘むる本願を協こと灼
然く。地藏さすよ。やがて其表現と通ひ協あや。此經も。佛祖
忉利天子て說法の時。小地藏の來由。その本願を演ぶる趣
小書。大乗經にて。佛祖の世を過て後よ。記せん。般生
ど。佛祖の本願也。正う其本說乃傳へ遺れるを。摭り收める
物を見えたり。

て其道を信じ行へる人には靈も。緣小因立て。弥次く小加
はる。種々の物とも轉生して。共に了相助がく。弥倍くよ。
佛經小ける趣。小叶升て。種々の相を表現し。佛并天魔鬼神の

貌子現じて。幸福とも與へ。禍害をも為し。天神地祇の掌給ふ御態をも竊み行ひ。或ち天堂地獄極樂の変相をも示せて。世人も人故を倍く小。此道ヲ誘引亦くふぞ有り。

然るは道家の書共を見きを種々に妄説を吐散して。實あき鬼神れ名をも多く物せる。某鬼よ某神ふとて。道家の書れ妄説ふ叶へる。靈驗變相を見り。其道を行へる道士の幻説子實ふせむとて。魑魅妖鬼。また其道を行へる徒乃死せる。其道の鬼也成て。變現すある故や。佛者をよく道家を妄とし。道家はよく佛説を妄とされども。互か此理放辨へゝる人古今少一人もあたえ如何ぞや。惡神妖

鬼也。左ふ右ノ妖態を行ひ。言語也ぬ。石根木立水沫草片葉を以テ子言語しめ。世子詭さむとぞ窺ふある。神の道不志有らむ人也。よく此事を明めて。努力古傳子背ひ。古傳不れき謾説をば信考はじくある。然るは假初不も。信じて其事放行へ。其やがて因縁とありて。然る妖物の部ふ入る事そ。其證次く小云を見よ。阿那忌くし犯事ちるかも。

然るはまだ地獄の躰相苦相辯事は。長阿含經小。閻浮提南有金剛山内。有閻羅王宮。晝夜三時有大銅鑊。自然在前。鑊入宮内。王見怖畏出宮外。鑊出宮外。王入宮内。有大獄卒。臥王熱鐵上。以鐵鉤辟口。以洋銅灌之。從咽徹下。無不焦爛。事竟還與采女共相

娛樂と有る文を始也。諸經論を引きて。印度藏志小委く論るを見て辨ふ。後し出定笑語小も少う説へどき。

金闇羅王三熱の苦辱事は。起世經小れを委く見ゝれど。阿含經を小乗部小て。佛祖の正説乎と有りは。此文を舉する。亦て翻訳名義集鬼神篇小。琰魔、閻魔羅經音義。世鬼官之總司也。亦云、閻羅答魔聲之轉也。亦云、閻魔羅社。此云、雙王。兄及妹皆作地獄主。兄治男事、妹治女事。故云、雙王。或苦樂竝受。故云、雙也と見え。問地獄經小。閻羅王者。昔為毘沙國王。經與維陀始生王共戰。兵力不敵。因立誓願為地獄主とも云へり。然れど此は天地初發の頃より。在し物小も非也。中古小成

れる鬼が一族也。鬼官の司といひ。魔羅と云を思ふよ。妖鬼の較著なる物小て。佛祖は道を助けて。其説相手變現する役と知られたり。諸こそ天狗の苦相小等し。三熱の苦也も受るあり。其王ところ琰魔羅さへ。右は如き苦を受生ば。況て罪人を成て。至れ流者の苦刑状も實小怖しとも恐ろし。犯事共小て。佛祖は愚人を威せる。方便説とを悟正がくも。聞ぶとノ身の毛も弥豎。犯事共ありかし。但し其は。我徒こそ至らぬ所れき。佛道小入くる人を。ゲウモ。其教誠小背へる過有ては。必至る處あ族事は。云も更あ。是て琰魔は元より。糸魔が族故也。三熱の苦を受け。佗ふも其

苦を及ぼしてむと。漢土カ小も和ヤノも所定めば。地獄の相を表現して。佛祖の説を助くるありり。漢土アて早く古れ。变现地獄小至れる事は。法苑珠林小引アる冥祥記。晉趙泰字文和。清河貝丘人也。祖父京兆大守。泰郡舉孝廉公府辟不就。精思典籍。有譽鄉里。嘗晚乃膺仕。終於中散大夫。年三十五時。嘗卒心痛而死。心煖不已。留屍十日。平且喉中有聲如雨。俄而蘇活。說初死キ之時。有一人來近心下。復有二人乘黃馬。二人來扶我披徑。將東行。不知幾里。至一大城。崔嵬高峻。城邑青黑。狀錫將吾向城門入。經兩重門。有瓦屋可數千間。男女數千人。行列而立。何の經論小も。閻魔王宮は南方ア在る由ア。此下東行。

と云ふは不審あり。唯地藏本願經のみを。東方アり。はと是までの文。起世經より説く。王宮れ有狀。粗符ホアへ。正。吏著皂衣。有五六人。條疏姓字。云當以科呈。府君カ泰。名在三十。須臾將泰與數千人。男女俱進。府君西向坐。視名簿訖。復遣泰南入黑門。有人著絳衣。坐大屋下。以次呼名。問生時所事。作何罪行。何善以實言也。此遣六部使者。常在人間記善惡。真有條狀不可得虛。泰答。父兄仕官皆二十石。我少在家修學。而日無所事也。亦不犯惡。乃爲水官監。將一千餘人。運沙。裨岸。晝夜勤苦。後轉水官都督。知諸獄事。給馬兵。令案行地獄。

府君とは卽閻羅王を云へり。漢土ア變現せる地獄ある故

小。何事も彼國の風あると心を付て見べし。

諸獄楚毒各殊。或針貫其舌流血竟膚。或被頭露髮裸形徒跣。牽而行。有持大杖從後催促。鐵牀銅柱燒之洞然驅迫。此人抱臥其上。赴卽焦爛。尋復還生。或炎爐巨鑊。焚煮罪人。身首碎墜。隨沸翻轉。有鬼持叉倚于其側。有三四百人立于一面。次當入鑊相抱悲泣。或劔樹高不知限量。根莖枝葉皆劔為之人。衆相訾自攀。若有欣意。而身首割截尺寸。離斷。泰見祖父母及二弟在此獄中。相見涕泣。

地獄苦刑の如きさぬ。大うて經論ども小説なるが如し。

泰出獄門見有二人賣文書來語獄吏言有三人其家為其於塔卽入舍中。

追福を修せむ。小依て亡靈の地獄を遁れて。善所小遷する。あめし。御國の書共みを。殊う甚多く見え。然れど此を佛法也。甚じて私事あり。然るは地獄小隣。人は皆破律大罪。乃者ある。現世れる家の讀經佛事を行ゆ。感て罪を免へと云ふ法や。其をそれ讀む經行ふ佛事は。やがて佛の弘誓し法ある。其施行いよと。も破律の罪を消る。あやをかれて無き理。其讀經佛事よ感

て免ヨウレ事は唯其法乃尊タト由を示して其法を弘めむと考
慮心より作事れく罪人の善心小改アラタる由無れ也。あれ私
事小非アリして何ぞ神は眞乃道の罪を律ルるの法はかく
陋アラカニしき事小非アリ知らで犯せ漏過失アヤマシは。いふも見直し聞
直アラタ。祓ハラ之捨スツべき便タヨリをさへ。教子置給カタハラへきど。知ルくも其
を犯し道よ悖モトする惡事アキワガせる惡人オカシを。いふも傍カタハラより祓ハラふと
も。免ヨウ給ふ事れく。夜見國ヤラ逐ヤハ遣りて。永く世アメニ不出し給
ふ事あき此クそ眞タメの旨ハメありり。

泰亦隨入前有大殿珍寶周飾精光耀目金玉アマエ為牀見一神人姿
容偉異殊好非常坐此座上邊有沙門立侍甚多見府君來恭敬

作禮アマツ。泰問是何人。府君致敬。吏曰號名世尊度人之師。有願令惡
道中人皆出聽經。時云有百方九千人皆出地獄入百里城。在此
到者奉法衆生也。行雖虧殆尚當得度。故開經法七日之中隨本
所作善惡多少差次免脫ヨム。泰未出之頃。已見十人升虛而去。

この神人を何物の変現と云あらず未考へ得矣。又この沙門。
名を世尊度人師と号へむ。必地藏井アマツ變現ありと通也。そ
は地藏井本願經を見て知ル。

出此舍復見一城方二百餘里。名受变形城。地獄考治已畢者。於
此城更受变報。入其城見有土瓦屋數千區各有坊巷。正中有瓦
屋高壯欄檻采飾。有數百局。吏對校文書云。殺生者當作蟬。

生墓死劫盜者當作猪羊受人屠割。姪洗者作鶴鷺麈麋兩舌者作鷄鳩鵠鶴。捍債者為驢驃牛馬。星燭十日各有其名。五中皆古の轉生之事也。佛經論ども小見えとるが如し。但し此事は鬼神新論の論へる如く。俗の儒者れども絶て信せぬ事あれど。神の道元より在し事にて。其は罪の有無故とを通えに幽き由有て。神は御態と。然爲さまふと思ひる由有き。姑く此には洩し缺けて佛祖も此事は元より有して採りて弘道の具用ひれべ種々言痛く報應を説き故也。其説やがて因縁と成せて。佛説の行られし以來出來ある罪報れ轉生もいそ多かり。然るは宇治拾遺物語也。丹

波國篠村と云。处小。年頃平草^{ヒラタチ}や当方カタもあく多有り也。里村の者此を取て。人ノも心ざしあく。我クニも食れどして。年ハう過る程ス。其里より出でて。專とある者の夢ハ。法師ドモは二三十人ばかり出来て。申^{ハシ}き事シテ云ハシひ。何ある人ソト問ふ。此法師ぢらハ。此年ハうも宮仕ミヤツカへよく爲て候ハシ。旅ツキ。此里の縁ソキ盈ツキて。今は餘處ハへ罷ハシて候ハシ。あむびる事シテ。且ハは哀ハシ。若また事シテ由シテ申ハシさではと思ひて。此由シテ申ハシありと云ふと見て。打驚ウチホロきて。おノを何事シテ。妻ツヅや子ツヅ小語ハシる程ス。まゐ其里ハ人の夢ハシ。此定ハシ小見ム。正ハシして。あまく。同様ハシ小語ハシ。心ハシも得ハシ。年ハシもくきぬ。次ハシ年ハシの九十月ハシも成ハシぬ

小前サキ出來る頃あれど。山ふ入アリて草を求むる。小摠タタケて見
えべ。何あ旅事アカと。里國の者思ひて過スル程アリ。仲胤僧都
とて。説法竝アラひ。あき人アヒ事を聞て。不淨説法アハラ法師は。
平草ウカ小生ウカると云ふ説のある物アリと云々。然きは平草を
食スルらむよ。事欠カケ。あじき物アシキモノと有アリを思ふべし。是正コレヤ小佛
説有アリしよ。出來アリる罪報ミツボウ乃轉生アリあり。偶ハナかく事アリの有
とて。平草アハラ也アリて。不淨説法の僧アハラ。轉生アリせる物アリとは争アリ
う云はむ。さく旅を此草。佛説有アリて。後アリ出來アリる旅物アリも有アリま
じ。其を本文ある種アリの物アリも。佛法有アリて。後アリ出來アリる物アリ非
ざる。小準ナシへて知アリし。まく平草は食スルらむも。事欠カケ。

き物アリは有れど。よし僧の生れる平草アハラとも。人の食べ
た物と化アリる上は。食スルむ小あアリふ事アリ有アリらむ。却アリて罪
を滅アハシる理アリ。旅をや。此は平草アハラみからアリ。種アリの物アリ化
れ旅も同じ事アリ。然れど今昔物語集アリも見アリ。出雲寺アリ
別當アリ。己アリが父の成アリる鯰アリと知アリ。殺スルして食スル。あ旅アリども。
悪行アリきも。神アリ甚アリ悪アリみ給スル故アリ。喉アリ其骨アリ留スルて死
ぬる類アリも。然る正アリしに事の無らむよは。然アリしも心せん
旅アリ小足アリ。然アリど無益アリ殺生殘害アリを禁スル。其生アリを見て。其
死アリを見る。忍スル。其聲アリ聞スルて。其肉アリ食スル。忍スル心
も。常アリ存アリべざものあ。

泰案行畢還水官處。主者語泰卿。是長者子。以何罪過而來在比。
泰答。祖父兄弟皆二千石。我舉孝公府辟不行。修志念善。不染衆
惡。主者曰。卿無罪過故相使為水官都督。不爾與地獄中人無以
異也。泰問。主者曰。人有何行死得樂報。主者言。奉法弟子精進持
戒。得樂報無有謫罰也。泰復問。曰。人未事法時所行罪過。事法之
後得除以否。答曰。皆除也。

かく除罪あき人を使子遣^ヤて召^{ヨビ}る事。御國の書共小も。
多く記し傳へある。實も閻魔羅王の不明よ^リ起^ハる事あ
リ。趙泰早くも。糺魔の變現地獄^ハ相小。誑惑せられて。其道
小入らむと^ヒる心起^ハる故^ア。此問答^ハて憐^ムべし。既

小魔境^ハ入^ル事よ。

語畢。王者開^テ膝篋^ヲ。檢^セ泰年紀。尚有餘算三十年。乃遣^テ還^フ。臨別。主者
曰。已見地獄罪報。如是當告世人。令作善。善惡隨人。其猶影響可^ハ
不慎乎。時親表内外候視五六十人。同聞泰說。泰自書記以示時
人。時晉太始五年七月十三日也。

太始を泰始の誤あるべし。泰始は晉武帝と云^クる王の年
号^ハ也。太始といふ号晉代小をあし。若實小太始あらむ小
は。漢武帝を云^シ王の年号れきハ。晉を漢の誤^ハと^ヒて有^レ
ど。其頃をいまと。佛法^ハ傳^ハざる世あれば。漢^ハ誤^ハ小を有^レ
ざ^マと^クり。

乃爲祖父母二弟。延請僧衆大設福會。命子孫奉法精進。時人互來訪問。莫不懼然。皆卽奉法也。と有是。是ぞ諸越籍よ。變現地獄此有狀の世。ノ漏傳もれる始ある。

釈魔は人を其道よ誘ふ術計。あれ甚じだくも。あ大能るかも。是より前小。彼三代と云し頃より。前漢の頃まで小も。幽冥小至れる故事は。數多有きど。皆彼國は古傳小符へ係。天帝の冥府はみて。聊も佛籍ないはやる。地獄は身相よ符へる事なし。地獄の説をし實ふし有らは。佛道の渡らざる以前小も。冥府よ行あらむ人の其状を見よと云ことれ有様きかむ。此をもて彼道は渡りし以來。其道字弘むる釈

魔どもの。變現ある事を思ひ決むべし。れを此後よ漢籍ども小。變現地獄小到れる故事は。いと多かきど。皆此ノ準へて辨ふべき中。希ニハ天帝の冥府小到れるも有。そは冥報記よ記し傳。柳智感と云者。晝は縣職小臨み。夜は冥事を判せ。跡と有る冥府。また陰隲錄よ收。決科要語ある。程學聖せいふ者の到れる冥府など。是ありと思を。然流類をも諸書よ閻羅王府或附會し。道家の説をも合せて記し。直ちに天帝とも。上帝とも云べきを。閻魔王と志て記せるも有れ。熟く事實を考すて辨ふ。あく御國。此書小も此例あり。そは下小舉る所見て知べし。

れて右小舉スルる地獄の事狀サ。大旨よく眞比經論等小説トキ、
る趣サ符カナへて、表現せる後、小唐代の頃あとよどや、閻羅王
以外ふれや數人の冥王とも有よしを云ひ出スルる。其實を、
眞の梵經トモ論サタあき事なる故テ。蜀國サツ成都府といふ處
乃慈恩寺サシヌ藏川と云スル沙門の杜撰ハタチ。十王經トモ云ふを述
作スル。秦廣王。初江王。宗帝王。五宦王。閻魔王。變成王。泰山王。平等
王。都市王。轉輪王。十王ヒヂ事相を著スル。世小弘有ヒヨウタリ。是は妖
鬼所得スルて。まく其十王の形ハタチを表現して人ヒトを欺フシムく事と成スル。
此十王の中ハ閻魔王。五宦王ハタチ。佛經トモ見スル名メイ。餘
の八王ハタチ名は唐カナ代より次タマニい出スル。小弘ヒヨウ。藏川カナ

新作の王名も交スル。十王經トモ。具スルは。地藏菩薩發心因縁十
王經といふ。成都府大聖慈恩寺沙門藏川述スル。其末記
小北天竺比嚴佛調三藏といふ者。眞佛示現して演説せ
るを梵文カナ記して。漢の嘉平年中ハタチ。漢土カナ到スル。後八百
餘年成經スル。慈恩寺サシヌ藏川法師。經藏を點檢ハタチ。時ハタチ。偶然
小此梵經スル。見得スル。譯スル。は宋仁宗カナ天聖十年霜月九
日。一夜文殊并化硯スルして。勤めを流通せよと云スル。故ハタチ。藏
川大誓願スルして。流布せよむる由云カナ。然れど天竺の
嚴佛調といふ者。眞佛の演説せスル。梵文カナ記して。將來
きア空云カナへ陳スル。藏川カナ後は人の。例比幻妄の説あり。然

るは眞佛の演説を其俊小訳せられむふは。如是我聞一時佛といふ由有むや。藏川述と有もて、彼が杜撰ある事あ除し。然れど梵經ありと世よ誣むの心れく。佛經小撰して。一時の戯^{タコ}子作れる物を知られ。十王は名ども多くは漢風ふて。梵語^ハ无をもて、戯作ある事知らる。例を言はゞ。開元釋教錄よ。昔妬婦^{オツ}を恐^{アラシ}く者^{アリ}。そを制^{マサニ}シ^ル計^ツふく。遂^ツよ經文^ト擬^シして佛小託^シ。妬^キの罪^ハ極^{カナ}めて。畏^ルべき由を説^ヒふ。世^ハ傳來せる由見え^ム。其類^ハ物と思ひ^ム。是をもて藏經目錄^ト收れ^ム。漢土^ハても偽經^{シテ}立^{アリ}。さて此經御國^ノ傳^ハ迹^{アリ}。後^ハ少^ク御國人の^ハ攬入^ス事ども

も多か^{アリ}。人^ハ其文を見て。全く古^{アリ}御國人の偽作せる物也^ハ思ふ。委^ク事狀^ハ糾^シさ^レ誤^ミあり。そは下^ノ論^イ説^ドもを見て知^{ベシ}。

其はまた十王乃事^ハ。唐の頃^{ヨリ}云ひ出^ム由^ハ。佛祖統紀小^ハ。十王供^セ。世^傳。唐道明和上神遊地府^見。十王分治^{スラ}亡人^ハ。因^ト傳^名。世間^ハ終^ム多^シ設^シ此供^ハ。十王^ハ名字^ハ藏典傳記^{可考}者六^ドとて。閻羅^五官^ハ平等。泰山^ハ初江^ハ秦廣^ハとの名^ハ舉^{ハシ}。所見^ハ書名^ハ著^{ハシ}ゐる^ハ。凡て唐以後の書共^{ハシ}る戯^モて知^{ベシ}。

されど十王^ハ名悉くは見え^ム。餘^ハの四王^ハ名^ハ正^{ハシ}小藏川^ハ杜撰^{ある}。おと炳^{ハシ}焉^ハし。中^ハ小閻羅^ハ五官^ハ。二王^ハの名^ハ所見^ハ。

提謂經を舉ハシマれど。此名を元ハタケよア。梵經ハヌムある名あれむ。今論ふ限カギリよりら矣。

はゞ同書ハシマ。熙寧五年七月。歐陽永叔自致仕。居穎上。日與沙門遊。因自號六一居士。名其文曰居士集。息心危坐屏郤。酒肴臨終數日。令往近寺借華嚴經。讀至八卷。倏然而逝。永叔初登政府苦於多病。嘗夢至一所。見十人冠冕列坐。一人曰參政。安得至此。永叔問曰。公等非ハタケ氏所謂冥府十王乎。曰然。因問世人飯僧造經果有益否。曰安得無益。既寤。病良已。自是益知敬佛。その注。樞密副使吳充撰行狀云。此事得於公之孫曰恕。と有り。

永叔が佛道ハシマ入きる由とは。唐書の本傳を始め。傍ハシマ書など

も小見えハシマるを。事長ハシマれど記し出ハシマ。王舉ハシマ。ナ入ハシマれ
はゞ蠡海集ハシマ。佛老ハシマ。有地府十王之説。と云。可厭を思ふよ。梵經
小れき。王等の名は。道家ハシマ徒の云ひ出ハシマむ哉。其説を信むる
人の有る小所得て。彼國乃妖鬼ハシマ。十王經の説相ハシマ符へて。
十王不變現せらあと。疑あき物あり。

凡て妖鬼遊魂の類を。妄説ハシマまき其説ハシマ。人ハシマ迷惑によるを
伺ひて。奇怪ハシマ變現を爲ハシマ事は。鬼神新論ハシマ。具小論ハシマへれど。
此小は云ハシマえれや下小三途川の老婆ハシマ牙ハシマ。皇朝の昔
語を舉て。其所小論ハシマ小説ハシマをも合せ思ふべし。

而て皇國ハシマ。地獄ハシマ往ハシマる事ハシマ有し始ハシマ。今昔物語集ハシマ。支

武天皇は御代小。豊前國宮子郡の小領小。膳臣廣國といふ人有り。其妻は前より死り。塚が。慶雲二年といふ年の九月十五日小。廣國忽ち死け。而る小三日を経て。更に甦りて。人小語ける。我死しどき。使二人來れ。一人を髮を擧げ。一人を髮を束ぬ。流小子あり。死。

十 宮子郡を今の京都郡あり。さて此事は。今昔物語よども。古入く靈異記に載せれど。二書を合せ見て。目易く記せる。中よ。多く今昔物語小依よきは。彼書名を舉ある。且く此小子也。廣國が稚き時。書して。觀世音經の變現。あ。由下文。見。餘の傳。共に合せ考る。小。髮を擧ぐる一人を地

獄の使者と通ひる。此小子は副來ると知れ。う。

我此二人小副往く程。二驛ばかりを度。路中より大。ある河あり。橋を渡し。金をもて塗嚴ね。其よ渡て。彼方より。極めて謐き所なり。使人小。此を何ある處ぞと問へ。渡あるを南。國。あ。と答ふ。其處より至れ。ハ官人あり。皆兵を佩て。追往く。れを進行む。金宮。門を入れて。見れ。王在。金座。居。廣國を見て。今汝を召す。汝が妻は愁申せし。小。依て。尔りと。即ち。女。成。召す。此を見れ。死せる妻あり。鐵釘を以て。頭。小打て。尻。小通。額。小打。釘は。頭。小通。あ。鐵の繩を以て。四枝を縛りて。八人して。擧げ。將來れ。

渡あるは南の國。と有るを。靈異記小は。度南國と記て有り。
塙本小音讀うせ候を誤あり。此を諸經論小。閻魔王の國は。
南方カキ有在る由見カキるふ。符せカキる幻説あり。然れハ南カキ國
といふを正タマシした。唯地藏本願經うのみ。東方と有生カキ其を
誤寫あらむも知べらば。まゝ此王は。卽閻魔王と知れ。そ
ニ四枝を四肢カキて。兩手兩足をいふ。新婆沙論。鐵釘地獄。
獄卒撲之。偃熱鐵上舒展其身。以釘釘手足。周遍身體。益五百
釘苦毒號吟猶不復死。久受苦。とある其苦相を現せ。王問云く。汝此女カタ子知生カタや。廣國云く。此を我が昔の妻あり。
王云々。此罪を蒙カツれる事を知カタや。廣國云く。我知らカタ爰カタ小女

小問ふ。女答云く。我死せると死。汝我を惜カレまにして家あり出
遣カキれ。我其を恨カタみて愁申せ。王此聞て廣國小云。らく。
汝實ツミナカ罪無カタり。汝カタ妻の愁當カタ速スカよ家カタ還カタるべし。

琰魔の裁斷カトリいと理カトリ小かあへり。但し斯カタむの事小。廣國

を召取ヨコトらばとも。裁断あるきカタ物カタや。

若汝モレが父を見むを思は。此より南方小行て見カタしと云ふ。
廣國行て見る。實カタは我父カタり。甚熱アツき銅柱カタ立て抱イタし免。
鐵釘三十七を其身カタ打立カタ。人鐵杖カタを以て朝アツ小三百段ヒル書
三百段ヒル又小三百段ヒル合せて九百段ヒル。日カタおと小打迫カタ。廣國此を
見て悲みて。父カタ何カタある罪を作カタて。此苦を受給カタへると問カタ

ば父云く。我が此苦を受る事は。我生イモトアセし時ハ。妻子ヤシナを養ヤシナむが為ハ。或ハ生物イキモノを殺コロし。或ハ八兩の綿ワタを人ヒトヲ借カサガして。強ムカシ十兩より倍ハダハして責セキ取り。或ハ小力リトコトに量リタメて稻イナ拔ハサウ人ヒトヲ貸カサガして。大行オハラ拔ハサウ以ハタハて徵セキ取ル。或ハ人物ヒトモノを強レヒて奪ハバク取ル。或ハ佗タガ女メを斬ハサウ犯ハスルし。父母オハタハ孝養エコウヤウせば。或ハ師長シジヤウニ恭敬ハシメテせま。或ハ奴婢ヌビ小非ナシざる者ハタチを奴婢ヌビと稱ハシメテて罵ハシメテ打ハシメテ。如是カクシタモ罪ハハシメタモの故ハシメタモ。我が身少ナシしと云ハシメタモ。三十七の釘ハシを打立ハシメタモらきて。毎日ハシメタモ小九百段の鐵アラミの杖ハシを以ハタハて打迫ハシメタモらる。痛哉苦哉。何時ハシメタモう我ハシメタモ此罪ハハシメタモ免ハシメタモされて。身成安ハシメタモくせむ。汝返ハシメタモりて速ハシメタモ小我ハシメタモう爲ハシメタモ小佛ハシメタモ造ハシメタモり經ハシメタモを寫ハシメタモして。我ハシメタモが罪苦ハハシメタモを贖ハシメタモへ急ハシメタモ陥ハシメタモこと勿ハシメタモ。

廣國オホカが父ハ犯ハスルせむ罪ハハシメタモの如きは。顯ハシメタモふ天皇オホキミいまし。幽ハシメタモを大國主オホシマツ神ハシメタモいまして。罰ハシメタモめ給ハシメタモ小我ハシメタモが神ハシメタモの道ハシメタモなる拔ハサウ。釈魔竊ヒツガラよ其御政ミツラシトを窺ハシメタモい奪ハバクひ奉ハシメタモりて。傍ハタハタよ斯ハシメタモる地獄ハシメタモを變現ハシメタモあて。愚人オホトコを陥ハシメタモれかハシメタモる言ハシメタモを云ハシメタモしめて。彼ハシメタモ新治道ハシメタモを弘ハシメタモめむと。計ハシメタモある。和漢ハシメタモの先賢ハシメタモ一人ハシメタモも。此理ハシメタモを論ハシメタモひ置ハシメタモさゆを何ハシメタモぞや。其ハシメタモ多く事識コトレリドモ等ハシメタモ。物識モノレリふは非ハシメタモざハシメタモしかはあり。物ハシメタモを知ハシメタモりて後ハシメタモよ。事ハシメタモは知ハシメタモべしと。己ハシメタモが常言ツネゴトふ云ハシメタモふも。是故ハシメタモ尔ハシメタモ。我ハシメタモ飢ハシメタモて。七月七日ハシメタモ。大蛇アカイヌと成ハシメタモて。汝ハシメタモが家ハシメタモ小入ハシメタモし時ハシメタモ。佗タガの犬字ハシメタモ呼ハシメタモて。咋ハシメタモしめ。打追ハシメタモしうば飢ハシメタモて還ハシメタモまき。

は。正月一日。狸とありて汝が家入しかむ。飯を供養し。
味物を與へて。食飽しめ。其を以て三年の糧を継ぐ。

狸一本よ猫小作る。狸を卽猫あり。漢籍小も。令狸執鼠と見
也。本艸和名。家狸一名。猫和名禰古末と云。

我兄弟上下。次第あく。理を失へる故。犬坐成て不淨
の物を噉ふ。我ら爾ち赤犬と成盈し。凡そ米一升を布施に
る。け報也。三十日の糧を得。衣服一具を布施に。の報也。一年
乃衣服字得。經残讀しむる者は。東方金宮小住し。願小隨て天
小生。佛井を造る者は。西方淨土よ生じ。放生ほる者は。北方
淨土。生也。一日齋食。寺院者を。十年の糧を得むと。

世の説。赤犬も人よ近き物ぞといふ事ある。かく流事よ
アヤ云出ぬ。橘廣相の赤犬を成ると云。古續古事談。
十訓抄。あと小見。されど。其も己が天満宮御傳記小辨へ
れむ。彼書。就て見べし。東西北の淨土。事は既ノ論。但し
其は方便説。あ流。偶。とも其説。小符ふ事實の。ある
は。例の表現。相れる。と。言。あくも更ア。

廣國具小善惡。業ふ因アて。受る處。報を見。怖きて還來
ア。本北大橋。至れ。門を守。人前を遮りて。云く。北内ふ入
ぬる者は。更。還し出さ。と。廣國。あはらく徘徊する。小子
出來。守門の者。そ。小子を見て。跪きて禮。小子廣國を

喚て方脇門よ將至^{カタワキ}て。其門を押開^{カセハラフ}たて出し。汝此より速^ユ往^{カム}けと。廣國小子よ問て云く。汝も誰子ぞと。小子答^{カタマリ}云く。汝が稚^{コガ}き時^ト不寫^{ウツ}せる。觀世音經ありと云て。還り入^カぬと見る程^カ小^コ卽^{カタマリ}甦^{スカイキテ}りぬと語^{アヒル}た。因^{カク}て。又^ト此の事^トは。是れ即ち^{カタマリ}也。因^{カク}て。又^ト此の事^トは。是れ即ち^{カタマリ}也。觀世音經也は。法華經の普門品をいふ。凡て古書^{シテ}ども小佛經の佛井と現^{カニ}れて。靈驗^{ホド}を施^{スル}せる事の見え^{スル}其を尋常^{ツキ}は人を。實^{スル}其經は威德^{カタマリ}ふよ^{カニ}法事^{カニ}と思ひ。普通の學者を。偏^{カタマリ}て。古書^{シテ}妄說^{カニ}を記せる物^ト思ひ居^{カニ}。共^{カニ}非^{カニ}あり。實^{スル}を紳魔^{カニ}の。其^トと變現^{カニ}して異驗^{カニ}を示^スし。人を誑^{カニ}して。其道^{カニ}を引^{カニ}入^{カニ}。ふそ有^{カニ}る。乃^{カニ}やうしよ。

其後佛を造^{アヒル}て經を寫^{カウ}し。三寶を供養^{カニ}して。父^{アヒル}が受^{カニ}る所の罪を贖^{アグチ}ひ黄泉^{アヒル}小至りて見^{カニ}し善惡の報^{アヒル}を委^{カニ}く錄^ルして。世^{アヒル}小流布せるを語り傳^{カニ}ふとある。是^{アヒル}ぞ皇國^{アヒル}にて。變現地獄^{アヒル}を行^{カニ}る。實事^{アヒル}の有^{カニ}始めあり。

是^{アヒル}ぞ以前神の御世^{アヒル}。數千歳^{アヒル}間^{アヒル}を更^{カニ}ふも云は^{カニ}。神武天皇^{アヒル}元年^{アヒル}より。此慶雲二年^{アヒル}まで。千三百六十五年^{アヒル}が間^{アヒル}。一人とあて地獄^{アヒル}小行^{カニ}て。其^ト身相を見^{カニ}。亂者無^{カニ}しを欽明^{カニ}。天皇^{アヒル}の十三年^{アヒル}。佛法渡^{カニ}し以來。此國^{アヒル}よ見聞せざる。廣大不測^{カニ}の妖驗^{アヒル}いや。次^{カニ}く小起^{カニ}り來^{カニ}て。遂^{カニ}小かく唐土^{アヒル}を同様^{カニ}。かゝる實事^{アヒル}。見聞^{カニ}事^ト併^{カニ}成^ス。是^{アヒル}をもて總じて

佛道の不測どもは。彼道の渡ると共ふ。副來於諸魔ソニキども。變現するあ協事を辨ふべし。あゝ今昔物語小記せる。元興寺に智光チクコウと云ひる僧。行基法師を嫉み惡める。小據スコトて。暫く行くる地獄などは。正しく行基が幻術を以て示せる。あるあ協事云も更尔アリ。

儲トトロの後アフタは倍スル。此事有し。中少靈異記マツク。今昔物語集。小聖武天皇御世アメノミコトノヨリ。攝津國東生郡撫凹村といふ處。大きよ富見る人有け。此人漢神カナガミの崇タマリを負ひて。其事を遁れむ。七年を限カキて。禱祭トリナフめける程。毎年一牛コロ。犠殺コロハシ於れむ。七頭の牛コロ。犠殺コロハシせり。七年既アリ。祭畢タマハシて。其人重き病オモヤシを受

て。醫藥方療ヒツヨウされども愈イヒ。ト者アラ。或集めて。祓ハラい祈ハシメると云へ。ぞも。弥增イヤシ。小病ヤマむ。

桓武天皇紀。延暦十年九月。斷伊勢尾張近江美濃若狭越前。紀伊等國百姓。殺牛用祭漢神カナガミと見え。三代格小。此官符を載せられ。此頃の人はせし事を見也。儲其神を。何ちふ神カナヒム。いま。考へ。甚悪き神とは聞え。ト者とは。ト部氏トヒタノミコト。祓ハラい祈ハシメ。人ヒト。陰陽師カミヤシとせり。

爰小病者思ひ。我身小重病を得しは。年來牛コロを殺コロハシせる罪コトハ。よる故あらむと思ひて。病アレ。臥ハスせる年アリ。毎月六齋日

小闕カナを戒カニを受け。方カく小使カニを遣カハして。生物イケルモノを買カひて放生カを行ひけり。而る小七年の末カニ至カりて。遂カ小死トキぬる刻カ何カう思ふりむ。妻子カニ云カりらく。我死シテあるむ後タメ。又タメ忽タチに燒ヤうべ。九日置カキきと云カり。妻子カニら遺言カニれ。あとく葬ハムらばて有カり。小九日と云カ、小活イキて語カニげるは。

かく迷カヨシの心出カみ候カ。所謂魔緣イハヨルにて。變現地獄カニ小伴カニもれて。誰惑せら候カ。因カありり。憐カニむべし。雜令云。凡月六齋日。公私皆斷殺生スと見カ也。此を月廿八日。廿三日。十四日。廿九日。十五日。三十日をいふ。佛經論アガども小依カタマリて定カタマリられカ。又。よく妻子等カニ云カふ言カニを味カニひて。釈魔ワザの態カニあらへカ事カニを知カニべし。

然カナるは實カニ小死シテむよは。九日有カて甦トキる事カニ残カ。ほゞカニた小知カニへき由カニあし。此を釈魔カニ幻カニをもカニ見カニき候カ態カニある故カ。家カニ殘カれ。當妻子カニもし實カニ死シテゝカニと思カニひて。燒ヤあらむ。小は地獄カニの狀カニを語カニら。令カニべき便タヨリ。あカニ故カニ。自然トミヨリの如カニく。かカニ言カニしめカニ。物カニあり。下カニ小舉アゲる讃岐國カニの綾氏カニある富人カニは死シテ候カ時カニ行者カニ託カニ。正カニて。我身カニを七日置カキ。と云カニし。也有カニるも是カニあり。

我死シテし時カニ。牛頭ウシカニラ。かて身カニは人カニある。七人出來カニて。我が髮カミ小繩カニを於カニけ。其を捉カニえて。立衛タヌキりて。將行カニし。前路カニを見カニれ。樓閣カニある。此カニを何カれる宮カニぞと問カニす。七人の者カニ眼イカ子カニ瞋カニかして。我カニを眞カニみて。云カニ事カニふく急カニき。往カニけと迫カニむ。既カニよ門内カニ入カニぬ。是カニは。我カニみがうら。

閻魔王宮れどと知る。王此七人を向ひて。此を汝等を殺せむ
讐アメう。答云く當小是ありと。七人各々膾机アマヅギと。刀を成持出て。我
等を殺せむ。如く。膾アマス小造アシテて噉はむと云ふ時モチ。千萬餘人忽
小出來て。我等縛アハリて繩アマを解アハシルて云く。此人の咎トガア非モナ。祟アシキる處
の鬼アツツ祭アツツらむ爲アシタク小殺せむ。然れど鬼神は咎トガア非モナ。崇アシキる處
居アリて。千萬人と七人を咎トガア有無ヒザトを毎日アタマヘアラワ小訴アハシル諍アラフふ。あと。火を
水とは如し。琰魔王此理非モナを判断し給ふこと能アハシルべ。而る小
七人の者アホ強アハカナ小申して云く。此人我等アタマが四足アシを截アハシルて。廟アマツ
祭アツツ死アリ然アリば此を得て。膾アマス又造アシテて食はむや。千萬人もあす。
王不白アハシルして云く。我等よく此事成知れど。更アラタニ小此人の咎トガア非モナ

矣。鬼神の咎トガア有りと諍アラフふ。王此事成定め煩アラハシいて。八日を逕アハシての
明日アマタ小參アハシル。判断せむを告アハシムて。各アリ返し遣アハシムれ。九日といふ
子集アマツシテ會アツツて。訴諍アハシルふこと前アリの如し。閻羅王アマツあはち。員多かる
方アリ就アハシムて判断せむ。千萬人アタマ方アリを理アハシルと定アハシルられぬ。

あれば千万人を。六齋日アハシル小放アハシルる生類アリもれるふし。下文小
見えアリ。是は六齋の事成さず。定アハシル煩アラハシいて日アハシを延
き。員多かる方アリ就アハシムて判アハシルせるを思ふよ。閻羅王といふ鬼は。
いとも英斷アハシル。鬼アツツあり。かく不アハシ不明の物アリして。斷
獄の官アリ。庶アリこと。實アリ其任アリ不アハシ當アハシ。決めて非道アリある判断
多かるべし。多少アリを別アリ。多アリ就アハシムて定アハシルるは。拙吏アリ已アリざれ

卫。千万人此を非とほきども。是ある所也。千万人此を是と
考れども非ある類也。常多かるをや。主。麻闍魔王。かく聰
明あらゆる故也。其從者の獄卒どもの奸を行ひて。人を非
命小あとし殉脇く事もあく、少からず。

七人の者此を聞て。舌嘗冒を志て。唾を飲み。膾を切り。穴を噉ふ
效を為し。妬み歎き。刀杖捧りて立て。各云く。怨を報ざること。
限れき愁あり。我等此を忘れず。後小札を報むべしと云て。各
各去りぬ。千万人を我を敬い。幡を擎げて。王宮を出し。輿小乗
せ。前後左右を圍繞し。讚歎して送る。彼衆人うち一色の容を
作せ。爰小我問云く。汝等は誰人うて我を助くると云へぞ。

答云く。我等は汝が年來かひて放て。生類あり。今恩を報ゆ
るありと云し。先語り。其後を増く誓願を發して。效小も神
我祀らに。深く佛法を信ぶて。已く家小幢を立て。寺と成し。佛
を安置し。法を修し。放生し。其後は此人を。那天堂をそ号り。終
終了病あく。九十餘歳ふて死りると云也。

撫凹村小堂を立てる人有流故也。かく号する所也。此事
今昔物語子載。小文。靈異記を採れりと見也。互々
比精粗あれど。合せ見て。其宜き小從いて記した。

斯て撰者の評也。龜奈耶經說迦留陀夷昔作天祀主。由殺一羊
得怒報所殺云く。最勝王經說流水長者放十千魚。魚生天上以

四十千珠現報流水長者。其斯謂矣と云。此地獄を見せしと
幻術を信小此謂うて。此頃諸國小漢神を祭る事流行しうば。
遂小は其道の弘まる。妨と成らむ事哉思ひ。且は右の經説ど
もよ叶へて。放生は功德ある由を勧めむとは態ワザを見。此御世
小讃岐國香川郡坂田里小夫妻共ノ綾君氏リョウナミ
有り。其隣ナリ極めて貧く。寡ヤモチ子もれき老嫗の
在けるが常よ其富家小行スル食を乞ふを。家室憐みて。日々
小食を與ふ。家主此を厭ひて。此後を自分は飯を分す。與へ
云ふ。家室竊シカク。我が分飯を分て。養ヒラメキ程小釣を業と
する者アリ。海シマで釣ハタる小鉤繩カキ。蠟カキ十具集著て上

正き。彼家主此字買ハサはむと云ふ。釣人米五斗小賣ルウらむと云
ふ。家主釣人の云如く。直タタを渡して買取り。僧を請じて。呪願
せし免て。海シマ放ハセり。其後家主從者と共に山サンに入て。薪カキ
伐ハサる。枯カキ松木カキ登ハシりて。木カキ落ハセて死ハセり。然る小其
人オ行者ソト託ハシて云く。我身ハシ燒ハセとれく。七日置ハセれと。行
者の語ハシ隨ハシい。山サン荷ハシ持ハシ來ハシて。期日ハシ待ハシける。七日
至ハシりて蘿ハシりて。妻子ハシ語ハシ云ハシく。前ハシ小僧ハシ五人。後ハシ俗ハシ五人有
て往ハシく。其道廣く平ハシ小ハシて。直タタと墨繩スミナカの如ハシし。其路ハシの左
右ハシ寶幡タテツライを立ハシ列ハシ。前ハシ小金宮ハシ。此を何ハシ當宮ハシと問
乎ハシ。後ハシ俗ハシ諱ハシ。小云ハシく。此を汝ハシ家室ハシ生ハシ。宮ハシり。老

古今妖魅考三之卷

○

媚を養ヤキる功德ヤクドウ小よりて。此宮を造ツグれるあり。汝我を知アリ。アヤ。吾答ワレへて知ルべと云スば。俗云く。我等僧俗十人ミツも。汝がカヒ買ツバキて海シマ小放ハナちし蠟カキ十具ツツありと。其宮の門カミ代左右トドカ小額ヒヂ子角ツヅ一オニ生アキゐる人アヒアヤ。太刀タケ或サ捧ハサウりて。我頸ソガ或カタ切カタツムリらむと。此僧俗諫イサめて。切カタツムリえ。門の左右トドカ小腹ヒツメしき膳ツカシ供サへて。諸人ハナ食ハスしむ。我其處アヒ子居リて。七日セブ飢ヌクて口カムよア焰ヒメを出した。十人の僧俗云スく。此汝ハタハタ老嫗カラナ小食ヒトコロを施ハシラさ。厭イハクひ懲ハシメめる罪ハシメ。報ハシメアリと云スて。僧俗十人ミツ我を將ハサウて。返カムと思シ小程ハリ。蘿イカハれアリと語り。死スル有ルも。放生施食ハシメ字シテ勸スルむ。状ハタハタい能似ハシメ。此事ハシメも靈異記ハシメと。今昔物語ハシメと不見ハシメ。麻ハシメを合せ見て記せア。

果ハタハタして此幻術の驗ハタハタにて。其長者は。效ハタハタ小も神を祭スルに甚ハタハタじ犯法者と成アリ。世ハタハタも放生を。比ハタハタひふき功德ヤクドウをして。此御世ハタハタよア。八幡宮ハタハタ放生會と云事ハタハタへ始め給スルるも。斯ハタハタる事ハタハタモ比多ハホカリ有リしを。朝廷ハタハタ小は。聞ハシメ食ハシメされし故ハタハタ有リべき。

石清水放生會の事を。巫學談辨ハタハタよ論ハシメれど。此ハタハタは記ハシメさば。法ハタハタ二ハタハタ書ハタハタ。同じ天皇ハタハタ御世ハタハタ。讃岐國ハタハタ山田郡ハタハタ布敷ハタハタ臣衣女ハタハタもいふ有リア。此女ハタハタ重ハタハタき病ハタハタを得スルア。時ハタハタ偉ハタハタしく百味ハタハタを供スルへて。門の左右トドカ小祭ハタハタ。疫神ハシメ子賂ハシメして饗ハシメ志ハタハタ。

姓氏錄ハタハタ。皇別ハタハタ。布師ハタハタ臣布師ハタハタ。首ハタハタといふ姓有リて。建内ハタハタ宿補ハタハタ男ハタハタ葛城ハタハタ龍衣津彦ハタハタ之後ハタハタ也ハタハタと。其餘ハタハタ流ハタハタあるべし。疫神ハシメを祭スルれ

る事は古史第七二段に傳。まゝ玉禪小論^{タケ}を見るを見べし。

而依間小。閻魔王に使の鬼。其家子來て。衣女^{ハシ}召^シ。其鬼走^{ハシ}ア疲^{ツカ}きて。祭^アの食を見て。馳^リて此を食^シり。鬼既^テノ女子捕^リて行^ムと^リ。間^{ホド}小語^{ハシ}云く。我汝^{ハシ}饗^ス受^ケつ。此恩^ヲ報^セむと思ふ。もし同姓^{オトシレキ}同名^{ホシ}有^ル人有^カと云ふ。女答^{ハシ}云く。同國比鶴足郡^{ウタツ}。同姓同名の女有^ルといふ。鬼此を聞て。此女を將^テ。鶴足郡の女^{ハシ}家^ヲ行^テ。其女小向^ヒひて。緋袋^{ハシ}よ^リ。一尺許^{ガリ}の鑿^{ハシ}をと^リて出^テ。此家の女^{ハシ}額^{ヒダ}立^テ。召^シ將^テ去^リぬ。彼山田郡^{ハシ}女^{ハシ}免^スし^ルれど。恐^ク家^{ハシ}小帰^スる。と思^フ小程^{イハシ}活^リ。彼鬼^{ハシ}鶴足郡^{ハシ}の女^{ハシ}を將^テ往^{ハシ}る。閻羅王^{ハシ}待^テ接^スて言^{ハシ}く。此を召^シめ^{ハシ}女^{ハシ}小

非^シ。汝^{ハシ}錯^エて此を召^シせ^{ハシ}。然れど暫^{ハシ}あ^{ハシ}の女^{ハシ}留^メて。棟^{ハシ}小往^テ。彼山田郡の女^{ハシ}召^シべ^シと。鬼憚^{ハシ}に事を得^シ。遂^シ小山田郡の女^{ハシ}を召^シて。將^テ來^{ハシ}れ。閻魔王見^テ。此召^シめ^{ハシ}女^{ハシ}あり。彼鶴足郡^{ハシ}女^{ハシ}返^{ハシ}べ^シと。鶴足郡の女^{ハシ}家^{ハシ}小帰^スれど。三日を經^スる間^{ハシ}。其女の身^{ハシ}を燒^{ハシ}失^{ハシ}い^シ。女^{ハシ}魂^{タマ}身^{ハシ}れくあて返^{ハシ}る^シ。と能^{ハシ}ぢに更^{ハシ}小還^{ハシ}て。閻魔王^{ハシ}小白^シさく。我返^{ハシ}され^{ハシ}こと云^{ハシ}也^モ。軀^{ハシ}失^{ハシ}せて寄付^{ハシ}く處^{ハシ}あしと。

か^ク、眞事^{ハシ}有^ルが故^ニ。死^トた小多くは勿^{ハシ}燒^スそと。斷^{ハシ}て置^キて死^シむるれ^{ハシ}。何^カ小^{ハシ}穢魔^{ハシ}の太^{ハシ}じ^{ハシ}心配^{ハシ}ア非^シや。まゝ今昔物語^{ハシ}。一條の摄政殿と申人御^{ハシ}り。其御子^{ハシ}兄を右近少

將舉賢と云。弟をば左近少將義孝と云。正義孝の少將を幼きアリる時より道心有て。深く佛法を信じて。悪業を造らば。魚鳥を食をち。況や自殺生を。余事は永く无かりアリ。只公事の隙小は。常ニ法華經を誦し。弥陀の念佛を唱けり。而る間。天延三年と云年の秋比。世に中小。疱瘡と云病發て。極て騒きアリる。少將疱瘡を煩て。内ノも參らば。あと云々。少程よ。兄の舉賢は少將も。同く煩て。寢殿は西東小臥であむ。共不煩ひ。兄乃少將也。只三日重く成て失ふられ。は。枕れと替て。例れ失ふる人の如く葬してアリ。其後三日を経て母の御夢。兄の少將中門の方小立て。極て泣く。母

臺の角小して此を見て。何と入給ちにして。此くは泣給ふぞと問ひれど。少將參らむ。是は思へども。得參らず。我閻魔王は御前よして。罪を勘られおほきは返來する。急て枕を被替ふ速。可免とて。免されおきは返來する。急て枕を被替ふれど。魂の入る方の違て。活る事成得。迷ひ行く也。心疎き態せさせ給へるとて。恨ゝ氣色にて。泣と見る程小夢覺ぬ。母夢覺て後思しりむ事何許あり。む。之有をも思ひ符すべし。

其時小王使ア問云。彼山田郡の女は。射いまぐ有や。使答云。未有也。小王彼女ア。然らば其山田郡の女比身を得て。

汝が身とせよ也。此不依て鶴足郡は女の魂還て。山田郡の女は身小入卫。甦りて卽言く。此を我家子非也。我家は鶴足郡小有り也。父母活れる事を喜ぶ間小。此を聞いて。汝も我子尔也。思ひ忘れさるかと云ふ。女更に聞ゆ。家ま出て。鶴足郡は家より往て。此を我家あり也云ふ。其家の父母。知らぬ女の來れるを見て。驚き怪み。汝も我子う非也。我子は早く焼失してきと。其時子女具小。冥途の事を語れど。父母聞て泣悲みて。生々亡し時の事どもを問ふ。一事も違小事なし。然れど其躰も非夷と云へども。魂現す。其あ生は。父母喜びて。此を哀れみ養ふ。山田郡は父母此字聞て。來て見る。正しく我子の躰あれど。

魂は無形と形を見て。悲み愛ける事限なし。然れど共小此を信じて同く養い二家の貳を。此女一人小付嘱し。此女は現す。四人は父母をもちて有り候。此を思ふ。饗を供へて鬼神了賂ふ。こそ空し祀功小非也。また人死ぬると云うども。葬に事を急ぐべからず。自然よかることも有れり也見ゆ。

古の條も。靈異記と今昔物語集とを合せ見て記せ。閻魔王が不明小。斯る姦鬼を使ひ。人非命小死しむる事は。いう小罪去が。此事小非也。冥官は首長爾らむ。然しも不正所為の有べき事うは。かく閻愚ある物をし。其職よりて。人間は賞罰を掌むる佛も。亦不明の罪を遁ぐ。も。

お本閻魔王ハ不明を。思合ハべき事ハ。同じ靈異記ハ。栖磐嶋ハ。諾樂のハ。京六條五坊ハ人あり。聖武天皇ハ御世ニ。大安寺ハ修多羅分の錢三十貫ハ借トて。越前の都魯鹿津ハ往テ交易シ。船ハ載セる。家ハ將來ルる時ハ。忽タリ病ハを得テ。船ハをば留メて。一人馬ハ乗セて家ハ帰ル。近江國高嶋郡ハ。磐鹿ハの辛前カラサキ。小至アリて。曉アラカルム。三人ハ子ハ追來ル。山代ハの宇治椅ハ。至ル時ハ。近く追付テ。共ニ副ハ往ク。磐嶋ハれを何ハ小往ク人ハ。四トと問ヘむ。答ケテ。閻羅王ハの闕アリ。猶磐嶋ハ召ヨ往ル。使ハあり。磐嶋ハ聞テ。召アサヒ。尤モ我ハあり。何故ハ召ス。使ハ鬼ハ云ク。我ハ等ハ先ハ汝ハ家ハ小往クて問ヘば。商ハ小往クて未歸ル。故ニ津ハ

小至アリて求モト。汝ハを召アサヒと累日ハシマリして。我飢疲モツカれぬ。若食物有ヤ。磐嶋云ク。唯干飯ハシメあり。與ハシメて食スむ。使ハシメ鬼ハ云ク。汝ハ已ハシメ氣ハシメ小病ハシメまむ。猶近アリきム。但シ恐ハシメ怖ハシメ事ハシメ勿ハシメれと。終ハシメ小家ハ望ム。食ハシメ備ハシメて饗ハシメは。鬼ハ云ク。我牛ハの穴ハシメを嗜ハシメ饗ハシメべし。牛ハ捕ハシメる鬼ハ我ハ。又ハ。磐嶋云ク。我家ハ斑牛ハシメ二頭ハシメあり。此ハを進ハシメらむ。我ハ免スし給ハシメ。鬼ハ言ク。我今汝ハ饗ハシメを得ス。恩幸ハシメ故ニ。汝ハ免スさむ。然れども我其罪ハシメ小ハシメて。鐵杖百段ハシメ持ハシメて打ハシメるべし。若モレ汝ハと同年の人ハ有ヤ。磐嶋云ク。我都ハシメて知ル矣ハシメ。一ハの鬼議ハシメて云ク。汝ハ何年ハシメ。磐嶋言ク。我年ハシメ戊寅ハシメ。又ハ鬼ハシメ云ク。率川ハシメ社ハの許ハシメある相八卦讀ハシメ。汝ハと同ク戊寅ハシメ年ハシメの

人あ卫。汝小替て。彼人を召將む。唯し汝牛一頭を饗せよ。ぬ
あ我う打添く罪を。脱せあめ年為小。我等三人が名哉呼て。
金剛般若經百卷放讀べし。一名を高佐麻呂。二名は中知麻
呂。三名は槌麻呂と云ひて。夜半小出去れ。明日見れむ牛
一於死トテ。磐嶋大安寺ヲ往て。仁耀法師といふを請て。金
剛般若經百卷を讀しむる。小三日を経て。使鬼來て云く。大
乗の力小依て。百段の罪を脱れ。常食よ。飯一斗を倍して
賜は正然。今よ後節ヒサシあど小。我が為小福を修して。供養せ
ふと喜びて忽失タナキぬ。磐嶋を九十餘歳ヲえて死カタき。と有ルを
も思ひ符ハシまし。



伊吹酒屋先生及門人著述刻成止書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 三卷 ○古史徵 神代部六冊 開題記五冊 十一卷
- 古史傳 自初卷至十六卷 四秩刻成 ○古史本辭經 五十音 義訣 四卷
- 神代系圖 石搭 箱入 一帖 ○同 小物本 一帖 ○同 挂軸料 一枚
- 靈能真柱 二卷 ○神拜詞記 一帖 ○玉多須喜 快 十卷
- 太元圖說 石搭 一幅 ○古道學神号 同 一幅 ○万聲大統譜 一幅
- 弘仁歷運記考 二卷 ○神字日文傳 二卷 ○疑字篇 日本文傳 附錄 一卷
- 皇國度制考 二卷 ○祝詞正訓 二卷 ○大祓詞正訓 物本 一帖
- 天津祝詞考 一卷 ○古道大意 講本 二卷 ○靜乃石屋 同 二卷
- 皇典文彙 三卷 ○童蒙入學門 一卷 ○入學問答 一卷
- 牛頭天王曆神辨 一卷 ○鑒宗仲景考 一卷 ○古今妖魅考 三卷

○德行式 <small>石揩</small>	一幅	○立言文 <small>同</small>	一幅	○鬼神新論	一卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small>	二卷	○悟道辨 <small>同</small>	二卷	○伊吹於呂志 <small>同</small>	二卷
○俗神道辨 <small>同</small>	四卷	○撞木隨 <small>卷</small>	○撞木隨 <small>卷</small>	○木匠祖神号 <small>石揩</small>	一幅
○赤縣歷代尺圖	一枚	○石揩類	數種	○衣食住神号 <small>石揩</small>	一幅
○春秋命歷序考	二卷	○武道祖神号 <small>同</small>	一幅	○鑿祖神号 <small>同</small>	一幅
○宮比神御傳記	一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○日女島考	一卷
○古學二千文	一卷	○草木撰種錄	一枚	○叶古略	一卷
○神字彙	一卷				

先生の著書凡て百部、卷數千卷より更に右全書目より其書等の大意も別小記せる。著述書目、集を見て知る。門人、生田國秀、河内盛征等記。

○神德畧述頌

一卷

○古道訓蒙頌

一卷

